アヒルの声

Ｙ’ｚ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アヒルの声

【Ｎコード】
Ｎ５１９１Ｃ

【作者名】
Ｙ’ｚ

【あらすじ】
気になる彼女は無口で無表情だ。他人と一切会話をしない。それでも彼女のことが知りたくて仕方がない。彼女と話しがしたい。彼女の笑顔が見たい……。そして、少しずつ彼女のことを知っていくうちに、彼女の存在がなくてはならないものになっていた。

―1―

『プー、プー、プー、プー……』　耳元で鳴っている携帯電話の音にようやく気がついた

『じゃあ、そういうことだから……』最後に由美子（ゆみこ）が言った言葉を思いだした。

（って、どういうことだよ）

由美子からの電話の内容を振り返ってみる。

『ねえ、光二（こうじ）……、私たち……、別れましょう……』

その先彼女は色々と理由を言っていたようだったが、最後の言葉しか思い出せない。

（ふざけるな！　そっちがどうしても付き合ってくれって、泣いて頼んできたんじゃないか！　俺は本当はマキを狙ってたんだ。それをお前が割り込んできて……）

俺は携帯電話を放り投げると、座っていたベッドにごろりと寝転んだ。

目覚まし時計の秒針の音が聞こえる。

日が落ちてきて、部屋の中は薄暗い。

（晩飯どうしようかな……）

ちょうど彼女を食事に誘おうとしていた矢先に、向こうから掛かってきた電話がそれだった。なんだか怒りが込み上がってくる。

（信じられねえ……）

適当に付き合ってくれそうな女を、思い浮かべてみる。

（その前に……）

俺は携帯電話を拾い上げ、今やっているバンドのリーダーに電話をかけた――。

中学二年の夏に、初めてバンドを組んだ時に、そのバンドのボーカルの女と交際を始めてから、女とバンドを切らしたことはなかった。由美子はこの四月に入学した大学の入学式の日に知り合って、

俺が入った軽音楽同好会に彼女も入り一緒にバンドを組んだ。彼女のパートはキーボードだ。俺はドラム。
別れた女がいるバンドなんてやってられない。結局、由美子と別れてバンドもやめた。
大きくため息を吐く――。
がっくりと肩を落とす。まだ信じられない。
（よし！）
憂さ晴らしにナンパでもしにいこうと思い、勢いよく立ち上がった。

俺は行きつけのクラブに来ていた。二階にあるカウンター席に一人で座っていた。中は軽快なラップサウンドで満たされている。
（問題はバンドだよな……）
ビールを飲みながら考えていた。同好会のメンバーを思い浮かべてみても、それぞれバンドに入っていて、掛け持ちでやってくれそうな人も思い浮かばなかった。
（女だったら直ぐなんだけどな……）
さっきから何人もの女が視線をぶつけてくる。でもタイプじゃない。――またか、と思って一応ちらりと流し目を送ってみると、スキンヘッドで濃いサングラスを掛けた男がこちらを見ていて驚いた。
「敦司（あつし）さん！」思わずその男の名前を叫んだ。
「ナンパか？」
「まあ、そんなとこっス」頭をかきながら答えた。
光田敦司（みつだ あつし）。俺の二年上で、サークルの先輩だ。彼はベーシスト。
俺は大学に入る前に一度彼の演奏を見たことがあった。大学に入って直ぐサークルの説明会に出席したときに、彼は少しだけ姿を見せた。その時、直ぐに彼に気がついた。スキンヘッドがとにかく印象的だったからだ。俺はずっと彼と話をしたいと思っていたが、彼はそれっきり姿を見せず話せないでいた。それなのに、彼が自分を知っていて驚いた。

「敦司さん、ずっと見かけなかったんですけど」
「ん、ああ……」敦司さんは生返事を返して、隣に座るとボーイにバーボンを注文した。
俺は、黙って敦司さんの言葉を待っていた――。
敦司さんは、バーボンを一口飲んでから口を開いた。
「やめたんだわ、ガッコ」
「えっ！　そうだったんすか？」
敦司さんは残りのバーボンをグイッと飲み干すと、二杯目を注文した。
「ガキができちまったもんでな――。働かなきゃいけねえし、もう三月には退学してたんだよ」
俺は何て答えていいか分からず、目を逸らした。敦司さんも黙って、二杯目に口をつけた。
「あ、あの……、バンドは？」俺は恐る恐る訊いてみた。
「ん、ああ……、やりてえんだけどな――。タイコが見つからなくてよ、たまにギターのヤツと二人で適当に遊んでるだけだ」
「マジっすか！」俺が声を張り上げると、敦司さんは眉をひそめてこちらを向いた。
「なんだよ。ビビらせるなよ」
俺は一気に興奮していた。
「あっ俺、今バンド探してて、あっ、あの――、えっと」
「えっ？　お前バンドやってなかったっけ？　一年のやつらだけで、あれどうしたんよ」
「いや、ちっと事情があって……」
「ふうん」と言いながら、敦司さんはカウンターの奥に目を向けてグラスに口をつけた。
「あ、あの……、駄目っすか？」敦司さんの顔を覗きこむように、頭を低くして訊いてみたが、敦司さんは黙ったままグラスに口をつけるだけだった。
「あっあの俺、むかし敦司さんたちの演奏見たことがあって、そん

で、そんときのドラムの人スッゲー気に入って――、あの、えっと……あの人って？」
「コウジか？」敦司さんは顔をこちらに向けずに言った。
「えっ、コウジ？」俺は呟いた。
「ん、あっそうか、おめえも光二だっけな」敦司さんはこちらを向いて微笑んだが、直ぐに正面を向き俺に横顔を見せた。サングラスで表情が読み取れないが、寂しそうな雰囲気を出していた。俺は変なことを口走ったかと思い、不安になって目を逸らした。
「おめえとは字が違うけどな。あいつは、三水に告で浩二だ」
「はあ……」俺は返答に困って俯いた。
「あいつは死んだよ」
「えっ！」驚いて顔を上げた。でも、なんて言っていいか分からなかった。
「そんなに、あいつのこと気に入ってたのか？」
「ああ……、ええ……。ドラムもそうなんですけど、叩いてる姿もスッゲーかっこよかったし……」そう言うと、敦司さんは笑みを漏らした。
「俺……、あの人の真似して墨入れたりして……」俺はTシャツを捲って右肩の刺青を見せた。
　敦司さんはちらりと刺青を見ると、にやりとしてから正面を向いてバーボンを一口飲んだ。
「あいつは左肩だったけどな」
「えっ！　そうでしたっけ？」俺は物凄くショックだった。
（あんなに痛い思いしたのに……、マジかよ）
「俺はいいんだけどよ……」
「ほんとっすか！」敦司さんの言葉を聞いて思わず立ち上がった。
「おまえ、いちいちでけえ声だすなよ」
「すいません……」俺は頭に手をやりながら座った。
「ようは、マコトが気に入るかどうかなんだわ」敦司さんはこちらを向いて言った。

「マコトさん？」
「ああ、ギターのヤツ。おめえはしらねえと思うけど」
俺は頷いて答えた。
「んじゃ、とりあえず一回やってみんか？」
「はい！」俺はまた大声を出して、眉をひそめられた。
敦司さんは残りのバーボンを一気に飲むと立ち上がった。
「じゃ、俺いくわ。さっきから、後頭部に早くどけって感じの視線がチクチクいてえからよ」敦司さんはツルツルに磨き上げたスキンヘッドを撫でながら言うと、階段を下りていった。
敦司さんが席を外すと、直ぐに女がその席に座り、愛想笑いを投げかけてきた。結構好みの女だった。その向こうでは、別の女が悔しそうな顔をしている。
俺はバンドと女をとりあえず確保した。

＊

翌日の午後十一時過ぎ、俺はスクーターに乗り、大学のクラブハウスに向かっていた。敦司さんのバンドのテストを受けるためだ。約束の時間はかなり過ぎている。昨日ナンパした女を自宅から追い出すのに時間がかかったからだ。
（くそ！　あの女、まさか家出娘だとは思わなかったぜ。もうちょっとで居座られるところだった）
俺はアクセルを握る手に力を込めた。学校は山の中腹にある。周囲は茶畑で、夜中にバンドの演奏をしていても苦情は来ない。茶畑の中を縫うように走る学校までの坂道は、通称学坂と呼ばれていて、急な登り坂でヘアピンカーブの連続だった。中古で買ったこの五十ccのおんぼろスクーターでは、頑張っても時速三十キロメートルしか出ない。俺はそれでもステップに置いたスネアドラムのケースを足で挟んで、気持ちでスピードを上げようとしていた。
学校の入り口に飛び込み、横目で左側の駐車上を見た。白のハイ

エースが一台止めてある。俺は舌打ちしながらクラブハウスまで急いだ。

クラブハウスの下に着くと、タイヤを滑らせながらスクーターを止めた。ふと、目の前を見ると一台のバイクが止めてあった。ホンダのＣＢＸ４００Ｆ、しかも俺が欲しかった初期型のソリッドカラーモデルだった。

俺は思わず近づいてそのバイクを見た。暗いので黒っぽく見えるが、明るいところで見ればオレンジ掛かった赤いボディーカラーだ。絞り込んだクリップオンハンドル、バックステップ、ヨシムラの集合マフラー。完璧な走り屋仕様に改造されたそのバイクを見て、俺は唾を飲んだ。

「おい、光二」上から敦司さんの声がして、上を見上げた。敦司さんが二階の外廊下から顔を覗かせていた。

「すいません！　直ぐ行きます！」俺は慌てて建物の右側へ走った。鉄の階段をカンカンと音を鳴らしながら急いで登り、二階の外廊下へ出ると、敦司さんはいなかった。ウチの部室の窓だけから明かりが漏れている。

「すいません！　おくれちっ……」部室のドアを開けると、正面に彼女はいた――。

胡坐を組んで左側の壁にもたれて座っていた。まず横顔が目に飛び込んだ。化粧気がなく幼い顔立ちだった。高校一年か二年生くらいにしか見えない。でも目が、というか表情が感じられなかった。ぼうと正面の壁を見つめてタバコをふかしている。一つに束ねた黒髪は、肩の先まで伸びている。洗いざらしのＴシャツ、胸にはバドワイザーのマーク、下はジーンズ。胡坐を組んだ裸足の足の裏は汚かった。

「早く、入れよ」敦司さんの声にハッとして、十二畳ほどの部室に足を入れた。靴を脱ごうとして汚れた白のコンバースが目に入る。二十四センチくらいかなと、靴を脱ぎながら予想する。

「えっと……」敦司さんに顔を向ける。

「マコトだ」敦司さんは顎をしゃくって彼女を差した。
俺は唾を飲んで彼女に少し近づいて、「俺、光二」と言うと彼女は一瞬、真っ黒な瞳をこちらに向けた。でも、直ぐに無表情なままタバコをふかす。
（ガーン、ショック！　俺の口説き目線を食らって、顔をトロンとさせなかった女、初めて見た――。せっかくサービスでやってあげたのに――。そうか！　こいつ超ド近眼なんだ。それしかありえねえ――。て、まてよ……、まさか、マコトって……、男？）
不安がよぎったが、多分女だろうと思うことにした。
「おめえより、いっこ上だぜ」敦司さんの言葉を聞いて、顔を引きつらせた。（うっそ……）
「すっ、すいません！　俺、光二です。よろしくお願いします！」腰を深く折って、頭を下げて挨拶しなおしたが、彼女は相変わらず無表情で、正面を見たままタバコをふかしているだけだった。
（ちっ！　ぜってえ、下だと思ったのに。でも、大丈夫かなこいつ。じゃない、この先輩）
俺は軽く会釈してマコトさんの前を横切って、部室の奥の右隅にあるドラムセットに向かおうとした。ふと、左隅に置いてあるギターアンプに立てかけてある、クリーム色のエレキギターが目に入った。塗装がところどころはがれた、使い込まれたといった感じの渋さをそのギターは放っていた。
「おっ、ムスタングっすか」と言った途端にそのギターのネックを掴んだ彼女の腕を見て、俺はぎくりとした――。彼女の左手首に大きな傷跡があった。おそらく、自殺――。そう、思わざるを得なかった。
立ちすくんでいると、マコトさんはゆっくり立ち上がり、自分に背を向けギターを肩に掛けた。
（小さい……）頭のてっぺんは俺の鼻の辺りだった。
小さい背中をぼうっと見つめていると、ギターアンプの上に置かれた吸殻だらけの灰皿でタバコを揉み消し、灰皿の横に置いてあっ

た、セブンスターの箱から一本抜き出してくわえると、シャリンとジッポのライターの蓋を開けた。俺は彼女がタバコに火をつけるのを横目で見て、ドラムセットに向かった。

まず、備え付けのキックペダルとスネアドラムを自分のものに代える。そして、ハイハット、タム、シンバルの位置と角度を調節し、軽く叩いてみる――。セッティングが終わって、「よしっ」と気合を入れながらシャツの肩を捲り上げたときだった。

マコトさんがこちらを見ていた。ぼんやりとした目で俺の右肩を見つめていた。

（んっ？　刺青？）マコトさんの視線を追ってみてそう思った。

なんだか刺青の辺りがこそばゆくなって、思わずそこを擦ると、マコトさんはまた、無表情な顔を部室の中央へ戻した。

ギターを抱えている彼女を眺めた。めちゃくちゃサマになっている。ギターが全く違和感なくなじんでいる。そして、彼女の演奏に少しだけ期待した。

気を取り直し、身体を解すため、軽く適当なエイトビートを刻む。

暫く叩いて、不思議と自分のリズムに自分がノッていると思った――。が、そうじゃなかった。敦司さんとマコトさんがいつの間にか俺に合わせていた。あまりにも自然なんで気がつかなかった。二人に（のせられている）と思った。

敦司さんはバスドラムにジャストでベースを合わせてくる。

（凄い――）

マコトさんは、独特なサウンドでカッティングを刻む。フェンダーのムスタング特有の丸みを帯びた音色が適度に歪んでいる。ジャズコーラス（ギターアンプ）ならではのシャリンとした硬いリバーブ音が微かに重なっている。

（なんだー、気持ちいい！）俺は久々に興奮してきた。

二人に負けまいと、少し複雑なリフを刻んで、得意げにクラッシュシンバルを『パシャーン』と鳴らしたときだった。

（かっちょええー！）マコトさんのギターの音に、思わず尻の穴を

すぼめた。さっきまでのラフなカッティングから突然『ギュオオー』っという、うなり声ようなファズトーンに変え、そのままソロを引き出した。クラプトンがチャーのギターを借りてソロを弾いているといった感じだった。

（めちゃくちゃ渋い）実は四十近いおっさんが、女子高生の気ぐるみでも着てるんじゃないかと思うほどだ。

（んっ！）ソロが終わる気配を感じた。軽くタムをまわして、『ピシッ！』とハイハットを強く叩いてアクセントをつけると、『ドッ、ドッ、ドッ、ドッ――』と、バスドラムだけを刻んでみる。敦司さんだけがそのリズムの合間を縫うようにリフを入れる。

マコトさんは、えっ――。マイクスタンドを自分のところに向けていた。

（歌うのか――）俺はわくわくしてきた。（でも、誰の曲やってんの？）

『タン！』と強くスネアを叩いてから、リズムをスタートさせると同時に彼女は息を吸い込んだ。

（低い！　そんでもって、めちゃくちゃ、ハスキー）心臓がバクバク打ってきた。なんだか部室の中の空気がいっぺんに引き締まった感じがする。

（どんだけ顔に似合わないことしてくれれば、気が済むんだ！）と思ったが、もう、彼女が実はオヤジでも子供でもなんでも、とにかくどうでもよくなった。今、三人で音を絡めあわせ、一つの音楽を作り出すことに夢中になった――。

一曲やり終え、満足感でいっぱいだった。大きく深呼吸する。そして、汗だくになっていた顔と首をタオルで拭い、手のひらを拭きながら、意外性たっぷりの彼女に目を向けた。

「えっ？」彼女はギターを下ろして、シールドコードを器用に八の字巻きで束ねていた。

「えっ？　ちょっと……」俺が慌てて立ち上がると、マコトさんは

ギターを入れたソフトケースを持って、出口へ向かっていった。「今日は終わりだ」敦司さんの声。目を向けると、彼も出口へ向かう。
（嘘でしょ……）たっぷりと前儀をして、挿入するのを拒否された感じだった。
俺は暫くがっくりとうな垂れ、だらだらと自分の機材を片付けると、部室の戸締りをして下向かった。
（やっべえー、俺、失格だったのかな）鉄の階段をとぼとぼと下りながら、何が悪かったのか考えていた。
下へ降りると、目の前の自動販売機の右横にもたれて、マコトさんが横向きにしゃがんで缶コーヒーを飲んでいた。缶コーヒーを持っている手にはタバコ。敦司さんは自動販売機に向かっていた。
「あの、敦司さん」
「んっ？」敦司さんはしゃがんで缶コーヒーを取り出しながら俺を見上げた。
「あの、俺、駄目だったんすか？」敦司さんは不思議そうに眉をひそめた。そして、ゆっくりと立ち上がる。
「えっ？　合格だろ？」敦司さんはそう言って缶コーヒーの蓋を開けた。
「ほんとっすか！」
「ああ、大丈夫だろ」
「でも、あの、なんか一曲やってムスッとしてでてっちゃうから、俺、駄目なんじゃないかと思って」
「一曲やったじゃん」
「へっ？」
「お前の前に連れてきたドラムのときなんて、ワン、ツー、スリーってカウントとっただけで、あいつ――」敦司さんはマコトさんを指差した。「アンプの電源ブチッて切ったぜ」
「えっ？　なんで？」
「ノリが合わないって思ったんじゃないの？」そう言って敦司さんは缶コーヒーに口をつけた。

「カウントだけで？」俺は顔を引きつらせながら、マコトさんを見た。彼女はブラックの缶コーヒーを飲み干そうとしていた。
（なんか、気難しそう……。ヘマすっと直ぐクビかな……）
「でも、おったまげたぜ」敦司さんの声。
「まさか、あいつが歌うとわな」そう言って敦司さんはにやりと微笑んだ。そして、「クックックッ」と声を漏らした。俺は不思議そうに敦司さんを見た。
「相当気に入られたぜ、お前」と敦司さんに言われて、なんだか嬉しかった。
（そうか、惚れたか。実はキュンッてしてたんだろ。ムフフ……）
そう思いながら、マコトさんが座っていたところに目を向けると、彼女はいなかった。『キュルル、フォン！』とバイクのエンジンを掛ける音が聞こえてハッとなった。慌ててそちらに目を向ける。
（げっ！）俺の憧れのＣＢＸの横で、マコトさんはギターをリュックサックのように背負って、ヘルメットを被っているところだった。
（嘘！）彼女はセンタースタンドを立てたまま、ＣＢＸに跨る。クラッチを握って、ギアをローに入れる。身体を揺すって、センタースタンドを外す。
「あっ！」俺は思わず声を上げた。倒れると思ったからだ。しかしマコトさんは、倒れそうなくらいバイクを左に寝かすと、足をついて『フォン！』とアクセルを一つ吹かして、アクセルターンを決め、今度は『グオオオン！』と前輪を浮かせたまま目の前を走り去った。
マコトさんが走り去った先を目で追う。もう、バイクの音は遠くなっていた。（嘘でしょ。あんな下り坂……）
「ククク……」敦司さんの笑い声。
「なに、びっくりしてんだよ」敦司さんの眉は思いっきり垂れ下がっていた。
（びっくりするでしょ、普通――）

―2―

鳥越真琴（とりごえ まこと）、それが彼女の名前だった。

『トリゴエ』と聞き、可愛い顔をしてガラガラ声で歌うの彼女の姿を思い起こし、俺は『アヒル』を連想した。

昨日真琴さんが帰った後、彼女について敦司さんが教えてくれたのはそれだけだった。俺はもっともっと色々と聞きたいことが山のようにあったのに、敦司さんは『バンド活動以外の付き合いも、プライベートなことを知ったり聞いたりしないのが、このバンドのルールだ』と言い、俺から訊くチャンスを奪った。

身長百五十七センチメートル、体重は秘密、スリーサイズは上から八十二、五十八、八十二で、靴のサイズは二十四、山羊座のA型。誕生日は意外とクリスマスイブだったりする。多分俺の予想は会ってるだろう。しかし――、（ききてえ！　しりてえ！　うおお、我慢できねえ！）

「山下君（やました）」突然呼ばれてハッとして横を向いた。同じ学科の美代子（みよこ）だった。俺が顔を向けると彼女は、はにかんだ表情で上目遣いで見つめてくる。俺はうんざりとしながら彼女の視線を外そうとして、思わず辺りを見回した。俺の周りは女だらけだった。皆、俺に熱い視線を浴びせている。

午後の最後の講義。俺は代返を頼んで直ぐ出るつもりだったのに、ぼうと考え事をしていたらしい。

「山下君、由美子と別れたんでしょ」美代子が言った。

「最初から、付き合ってたつもりなんかないよ」美代子の顔を見ずにそう言って、教壇のまん前の席に目を向けた。その席で由美子が必死に黒板の内容をノートに書き込んでいる。

由美子は頭がいい。本当ならもっといい大学にいけるはずだった。それが、受験日近くになって体調を崩し本命の受験に失敗し、浪人することを許されなかった彼女は、泣く泣くこの大学に進学してき

たらしい。受験勉強が面倒で、推薦でとりあえず受かるところを探して入ってきた俺とは、全然違うタイプの人間だ。
由美子と始めて会ったのは入学式の日。その日、俺は風邪気味で熱っぽかった。だるくて直ぐにでも帰りたかったが、同じ新入生のマキを見た途端、直ぐにどうやって口説くか考えた。でも、身体が言うことを聞かなかった。仕方なく、その日は諦めて自宅へ帰ると、アパートの階段の下に由美子が立っていた。俺と由美子はその時初めて会ったはずなのに、彼女は俺のことを知っていた。それで、具合が悪そうにしている俺を心配して、待っていたというのだ。
俺は、追い返そうとしたが、彼女はどうしても看病したいと、半ば強引に部屋に上がりこんだ。多分、俺をモノにするために彼女は必死だったんだろう。俺は、身体がだるくて追い返すのも面倒になり、彼女の好きにさせた。
彼女の作ったおかゆはうまかった。食欲はなかったのに、残さず食べた。引っ越してきたばっかりで、薬も水枕も何もなく、彼女が全部買ってきて、朝まで俺を看病してくれた。
翌朝には熱も下がり、二人で大学へ出たが、講義説明会の間じゅう、彼女はずっと隣の席で居眠りをしていた。彼女の幸せそうな寝顔は今でも忘れられない。
俺は彼女を恋人として認めた訳ではなかったが、彼女のほうはそれ以来完全に恋人きどりだった。でも、それなりに可愛いし料理も上手いし部屋の掃除もしてくれるし、抱きたいときには嫌な顔を一つも見せずに応じてくれる彼女が便利で、ついついだらだらと付き合ってきた。
それが突然向こうから別れの電話を掛けてきた。
（俺様を振るなんて……）
左を向いて窓際に座っているマキの姿を目を見つめた。
直ぐに彼女は俺の視線を感じたように顔を上げ、こちらを向くと顔をトロンとさせた。
（ほら見ろ、俺の魅力が分からない女なんて、お前と真琴さんだけ

だ！）

今日の講義がすべて終わり、俺は食堂の一角で缶コーヒーを飲んでいた。

同級生や先輩などに、真琴さんのことを聞いたが、彼女のことを知っている人間はひとりもいなかった。彼女はこの大学の学生ではないということが分かっただけだ。

でも、早朝や夜中に学坂を信じられないスピードで走り抜けていくＣＢＸのことは、バイク好きの人間の中では伝説になっていることを知った。

＊

数日後の土曜日の深夜、バイト先のコンビニエンスストアーでレジ打ちをしていた。普段は、夕方から夜の九時までしか働いていないが、今日は体調不良で深夜のバイトの人間がこれなくなったので、代わりを務めることになった。

バイパス道路沿いにあるこの店は、深夜でもわりと客が来る。

相撲取りのように太った大男の客に、商品を入れた袋とつり銭を渡し、愛想よく礼を言う。

下げた頭を上げ、次の客を見た瞬間、驚いて思わず声を漏らした。

「真琴さん！」

俺が反射的に口説き目線を放ったのに、彼女は無表情だった。

俺が戸惑っていると、レジカウンターの上に生理用品とコンドームの箱を置いて、ズボンのポケットからくしゃくしゃの札を出し、無造作にそれをカウンターの上に乗せて、ぼうっと俺の胸元辺りを見つめている。

俺は急いでその二つの商品のバーコードを読み取り、茶色い紙袋に入れると、さらにコンビニ袋に入れて真琴さんに渡し、レジを打ってつり銭を渡した。

真琴さんは無表情にそれを受け取る。
「あの、真琴さん？」
声を掛けたのに彼女は無表情のまま出口へ向かった。
引き止めたかったが、次の客がレジの前に立ったので、俺は彼女の後ろ姿を気にしながら、レジを打った。
（ゴムなんて……、男がいるのか？）

朝七時、バイトを終え裏口から店を出た。朝の光に目がちかちかする。
俺はおんぼろスクーターに跨り、考えていた。
真琴さんは、歩きでこの店に来ていた。ということは、この近くに住んでいるはずだ。俺は彼女が歩いていった方向にゆっくりとスクーターを走らせた。
手がかりはＣＢＸだった。暫く付近を捜したが、彼女のバイクを見つけることが出来なかった。
たまたま知り合いの家にいて、そこから買い物にきただけかもしれない。でも、買っていったものを思い起こすと、自分の家からきたとしか考えられなかった。
俺は彼女の家を探すのは、また今度にしようと思いながら、徹夜で腫れた目を擦った。

結局彼女の家は見つけられず、次の練習の日となった。練習は毎週水曜日の夜中だ。
休憩しようと敦司さんが言って、彼がトイレに行くと俺はすかさず真琴さんに話しかけた。
趣味は？　好きなミュージシャンは？　いつからギターをやってるんスか？
「……」
好きな男のタイプは？　キム拓と稲垣吾郎だったらどっちが好き？
「……」

「家、どこなんですか？」
「……」
「彼氏……、いるんスか？」
「……」
「俺のこと、どう思います？」
「……」
何も答えない彼女にいい加減腹が立ってきた。
「ばらしますよ！　この間、ゴム買ってったこと！」
そう怒鳴っても、無表情のままタバコをふかしている。
俺は溜息をついてドラムセットに向かった。
むしゃくしゃして、とにかく叩いて発散したくなった。
暫く無心で叩いていると、ふと彼女が俺のリズムにギターソロを乗せているのに気がついた。
（はあ……、ほんとかっちょいいんだよなあ……）
直ぐにさっきまでの嫌な気持ちがどこかへ消えていく。
それでも物足りなさが少し残る。
楽器でしか気持ちを伝えられない。
それなら、言葉はなくてもいい……、せめてもう少し、楽しそうな顔を見せてくれないかなあ……。

グオオオン！　とまた前輪を浮かせたまま走り去っていく真琴さんを見送った。敦司さんは横にしゃがんでブラックの缶コーヒーを飲んでいる。
「今度焼肉パーティーとかやりません？」
「パーティーねえ……」
「ねえ、やりましょうよ」
「そうだなあ……」敦司さんはめんどくさそうな口調で答えた。
それでもしつこく誘っていると、「そのうちな」と言って立ち上がり、片手を上げて「またな」と言って帰ろうとした。

「敦司さんは平気なんですか？」敦司さんの後姿に話しかけると、敦司さんはゆっくりと振り返った。
「なにが？」
「真琴さんと話したいって思わないんですか？」
「別に」と敦司さんは眉毛を不思議そうにたれ下げて答えた。
俺が奥歯を噛んで俯いてしまうと、敦司さんは何も言わずに帰っていった。
自動販売機の明かりの中で俺は、ぽつんと一人しゃがんで俯いていた。辺りは真っ暗闇だった。
駐車場のほうから車が走っていく音が聞こえる。
その音がやがて聞こえなくなると、辺りはしんと静まり返った。
今までやってきたバンドは、練習が終わると必ずみんなでどこかへ繰り出し、飲んだり食べたりゲームセンターでわいわいやったり、必ずそういう時間があった。
演奏が半分、その後みんなで遊ぶのが半分。
俺の今までのバンドの楽しみ方はそういうものだった。
でも、このバンドは違う。ただただ演奏するのみ。
練習中でも、一言の会話もない。
確かに演奏については、俺が今まで味わったことのない刺激を感じる。演奏を始めると直ぐにのめりこんでしまう凄さがあるのは確かだ。
そう思えば思うほど、もっと二人と親しくなりたいと俺は思う。
でも、当の二人はさっぱりだ。練習が終わると、缶コーヒーを一本飲んで、さっさと帰ってしまう。
練習で思いっきり高ぶった心に、ドライアイスをぶちかけられたような気持ちになる。
俺は飲みかけの缶コーヒーを無造作にゴミ箱に放り込み、おんぼろスクーターのエンジンを掛けた。
ペーッペリペリペリ……、真琴さんのバイクとは対照的な情けないエンジン音を響かせ、俺はクラブハウスを後にした。

翌週の火曜日、俺はサークル仲間に誘われて、仲間の一人のアパートでマージャンをやっていた。
「ロン！」（げっ！　またか）俺の対面のヤツにまた当たられた。
「ぐぞお！」俺は思いっきりパイをかき混ぜながら悔しさを紛らわそうとした。
「光二、おまえ今日全然駄目じゃん」
その通りだった。今日は全くついていない。

溜息をつきながら、仲間のアパートの部屋をでた。時刻は深夜一時になろうとしていた。
俺はマージャンで負けた罰として、買出しに行かされることになった。仲間のアパートはバイト先のコンビニエンスストアーの近くだったので、俺はそこに向かってとぼとぼと歩き出した。
人通りのない暗い細い道を、自分の靴音だけを聞きながら歩き、角を左に曲がると、正面にバイパス道路が見えた。
ポケットから財布を取り出し、金を確かめようと思ったときだった。
『フォン！　フォン！』とバイクの集合管の音が聞こえてきて、思わず顔を上げた。すると、バイパス道路から、一台のバイクが姿を見せたかと思うと、『グオオーン』と前輪を浮かせながらこちらに向かってきた。
直ぐ横を走り抜けていくそのバイクを見て、思わず叫んだ。
「真琴さん！」とその瞬間、俺は彼女のバイクを追って走っていた。
小さくなった、彼女のバイクが右に曲がって消えていく。俺は必死に彼女を追ってとにかく走った。
彼女が消えた角を曲がり、その先を見渡したが、彼女の姿はもうなかった。バイクの音も聞こえない。
俺は両手を膝について、肩で息をした。

暫くその場で息を整えてから、ゆっくりと彼女が消えた方向へ歩き出した。
（絶対見つけてやる）と思いながら携帯電話を取り出して、仲間を呼び出すと、「用事ができた。借りは今度返すから」とだけ言って電話を切った。

かなりの時間付近を歩き回ったが彼女のバイクを見つけることはできなかった。俺は諦めて帰ろうと、来た道を戻り始めた。
彼女が曲がった角が見えてきたところで、携帯電話を取り出して時刻を確認すると、午前二時を過ぎていた。
どおりで眠いはずだと思った。俺は大きく欠伸をしてふいに横を見た途端ハッとなった。目を擦ってもう一度見てみる。
間違いなく彼女のバイクだった。
何度もここを歩いていたはずなのに、今になって気がついた。彼女のバイクは、彼女が曲がって消えた道を百メートルも行かないところで、道から少し奥に建てられたアパートの前に止められていた。
遠くからこのアパートの二階を見たときに、あまりにも朽ち果てそうな建物だったので、無意識に探す対象から外していたんだと思った。
アパートの前は駐車スペースになっているが、真琴さんのバイク以外は止められていない。明かりのついている部屋もない。
俺は息を殺して、真琴さんのバイクに近づいていった。
一階の向かって一番右端の部屋の前にバイクは止めてあった。俺はその部屋のドアの辺りをじっくりと見渡したが、表札はなかった。
俺はなるべく足跡を立てないように、一階から順番に部屋の表札を確認していった。
表札のある部屋もあれば、ない部屋もある。あっても、鳥越という名前の部屋はなかった。
本当に彼女がここに住んでいるのか、心配になってきた。彼女だけでなく、誰もここには住んでいないんじゃないかと思った。

それくらい、このアパートはボロい。
それでも、俺はたった一つの手がかりを捨てる気にはなれなかった。二階の外廊下から、アパートの向こう側を眺めてみる。そこには、小さな児童公園があった。
俺は、そこで張り込みをすることにした。

車が走り去っていく音を聞いて、ハッとして目を開けようとしたが、あまりの眩しさに直ぐ目を閉じた。
目を擦りながら起き上がろうとしたが、首筋が酷く痛んで起き上がれない。仕方なく、痛む首を左に向け真琴さんのバイクを確認すると、バイクはまだ止めてあった。
ほっとしながらようやく居眠りしていたベンチから起き上がり、ずきずきと痛む身体を揉み解した。
日はすっかり昇っている。よくこんなところでこんな時間まで眠れたもんだと思いながら、立ち上がって腰を伸ばした。
携帯電話を取り出し、時刻を確認すると、午前十一時を過ぎている。
俺は、小便がしたいのを我慢しながら、もう一度ベンチに腰掛け彼女が姿を現すのを待った。
気になりだすと、数秒ごとに尿意が襲ってくる。無意識のうちに足がバタバタと地面を踏みしめてしまう。
もう、限界だった。（トイレに行きたい！）
どうしよう……。バイト先のコンビニまで行くか、仲間の部屋へ行くか考えていた。仲間は学校へ行っているだろうと思って、コンビニへ行こうと思い、立ち上がったが、なんとなく彼女が出てきそうな感じがして思いとどまった。
しかし、小便のほうも予断を許さない状態だ。
俺は、周りを見渡して、小さな滑り台の影にズボンのチャックを下ろしながら、小走りに進んだ。
（はうう……）至福の瞬間を身体を痙攣させて味わったときだった。

『キュルル！　フォン！』とバイクのエンジンを掛ける音を聞いて慌てて横を向いた。
「げっ！」真琴さんがヘルメットを被ってバイクに跨ろうとしている。（うおお！）俺は溜まっていた小便を一気に吐き出そうと力んだが、全く小便の勢いは収まらない。
結局、身動きがとれずに、彼女が走り去っていくのをただ見送るしかなかった。
がっくりとうな垂れて、最後の一滴まで出し切ると同時に、溜息も出た。でも、なんとなく希望が出てきたのも確かだった。俺は、ほんの少しだけ彼女に近づけたような気がして、嬉しくなった。

その日は練習の日だった。いつものように無言でただ音の絡め合いに集中し、あっという間に二時間強の練習を終え、外の自動販売機の前にしゃがんで缶コーヒーを飲んでいた。
後ろを振り向くと、真琴さんはいつものようにしゃがんで自動販の横にもたれかかり缶コーヒーを飲んでいる。
「真琴さん、焼肉好きですか？」答えないのを覚悟で訊いてみたが、俺の声など耳に届いていないかのような表情でいられるのは辛い。俺はそれ以上話しかけるのをやめた。
真琴さんがいつものようにバイクで走り去ると、敦司さんが言った。
「さすがに諦めたか？」
「えっ？　なにをですか？」
「んっ？　あいつと話するの」
俺は愛想笑いを見せて答えなかった。そして、ゆっくりと立ち上がり、この日は敦司さんより先に帰った。
（ムフフ、だーれが諦めるもんか。俺様が落とせなかった女はいないの）
俺はウキウキとした気分で、おんぼろスクーターで軽快に学坂を下っていった。

例のアパートの近くでスクーターを降り、押しながら歩いて前までいくと、前に真琴さんのバイクが止めてある部屋だけ明かりがついていた。（ビンゴ！）俺は思わずガッツポーズをした。
忍び足で近づき、ドアの横の窓ガラスに耳を近づける。中からは、チャーの曲が聞こえてきた。
間違いないと思った。彼女の部屋を見つけた喜びに、思わず飛び上がりたくなった。
もう、いてもたってもいられず、俺はドアをノックしていた。
何度かノックしたが、誰も出てこない。
無駄だと思いながらドアノブをひねると、あっさりとそれは回った。
（うそ、鍵かけてねえの？）
唾を飲んで、ゆっくりとドアを引いていく。チャーの演奏の音がはっきりと聞こえてきた。
少し空いたドアの中を見ると、テレビ画面にはチャーが映っている。俺は思い切ってドアをさらに開き、そっと首を突っ込んだ。
徐々に左に視線を移していくと、ローテーブルの向こう側に、真琴さんがグラスを傾けていた。
「真琴さん？」
俺が声を掛けても、彼女の視線の先はテレビに向いたままだった。
「あの、真琴さん！」少し声を大きくして言ってみたが、全く反応がない。
部屋の中を見渡しても、彼女以外いそうになかった。
仕方なく、俺は勝手に上がらせてもらうことにした。
（あんたが、何にも言わないからいけないんだからな）と俺は心の中で呟きながら、彼女の部屋に足を踏み入れた。
ゆっくりと部屋の中へ進み、彼女の右手に正座すると、ちらりと彼女の様子を伺った。
彼女は左腕でテーブルに方杖をついて、ぼうっとテレビを見つめている。テーブルの上に乗せた右手にはタバコを挟んでいる。

俺がそのタバコを見つめていると、ふいに彼女はそのタバコをくわえ、煙そうな目をしてテーブルの上に置いてあった透明な液体の入った瓶を掴んだ。そして、左の手のひらで横から擦るようにしてシャーっと音をさせて蓋を回して開け、グラスに注いだ。

その後瓶をテーブルの上に置くと、グラスを掴んでグイッと一気に飲み干す。俺は彼女の置いた瓶を見た。見慣れないラベルだった。彼女の表情を伺いながらそれを手に取ると、それはウォッカだった。

足を崩して部屋の中を見回す。真琴さんの後ろにはベッド、その向こうは押入れ、正面の窓の下には白いカラーボックスが横倒しに置かれていて、その上にはバーボンやウイスキーのビンが置かれている。そのまま右に目を向けていくと、テレビがこちら向きに置かれていて右の壁側に風呂場とトイレと思われるドアがある。俺の後ろには小さな流し台があり、横には一口コンロが置かれている、ざっと六畳一間だと思った。

まったく女らしい感じのしない部屋だった。ひょっとすると、ここは男の部屋で、突然パンチパーマでもかけたヤクザみたいな男が帰ってくるんじゃないかと不安になってきた。

真琴さんに顔を向けると、彼女は酒に酔ったのか、目がトロンとしていて、その目の周りはほんのり赤みを帯びていた。

「真琴さん、一人で住んでるんですか？」

彼女は何も答えず、眠そうな目でゆっくりと瞬きした。

そして、テーブルの上のリモコンを掴んで、ビデオを止めてテレビを消すと、立ち上がって蛍光灯を消した。

その後床にごろりと丸くなって寝てしまった。

「えっ？　ちょっと、真琴さん。ベッドで寝ないんですか？」

「……」

（えっ？　マジかよ……。これって……、好きにしてって言ってる？）

俺はどうしようか迷った。

いつかは彼女を落とそうかとも考えていたが、彼女の先制攻撃に

戸惑っていた。
（でも、なんかシャワーも浴びてないし、歯も磨いてないし、なんかなあ……）
それでも、ここで何もしないで帰ると、ますます馬鹿にされて、それこそ一生何も話してもらえないような気がしてきた。
（よし！）俺はついに彼女を抱く決心をして立ち上がった。
そして、玄関へ行き鍵をかけようとした。
「えっ？」鍵が壊れてて、掛けられなかった。
少し戸惑ったが、壊れているものは仕方がないと思い諦めて、彼女の横に添い寝した。
胸がドキドキする。女を抱くのにこんなに緊張したのは久しぶりだった。
彼女の顔にかかっている髪を人差し指でよけてみて、ハッと息を呑んだ。
彼女の口元は嬉しそうに、微笑んでいた。
夢の世界を楽しんでいるかのような寝顔だった。
現実の世界へ引き戻すのをためらいたくなるような寝顔だ。
なぜか、胸がきゅうっとなる――。心臓の鼓動がさらに高鳴る。
初めて見る彼女の感情を表す表情に、俺はついつい見とれてしまっていた。
暫くその寝顔を見つめていて、やはり彼女を抱くのをやめようと思ったときだった。
突然彼女が目を開け、じろりと目を合わせてきたので、ぎくりとした。
何か言い訳しようと思ったのに、声が出ない。
うろたえていると、彼女が俺にのしかかってきた。
「んっ！　んん！」いきなりキスされた。
「やっ……、んん……、んん……」彼女の舌が俺の口の中で暴れだす。
女に無理やりされるのは初めてだった――。

彼女が感じているのかは分からない。時折低く呻くような声を出すだけだ。でも暫くして、下から俺に突かれている彼女の腰が、小刻みに痙攣するのを感じて俺はそれに釣られるように一気に果てた。

俺は彼女を抱きしめて、快感の余韻に浸っていたかったのに、彼女はするりと俺の上から降りると、簡単に自分の後始末をして、パンツだけを身につけ、またごろりと床に丸くなって寝てしまった。

俺は起き上がり、溜息をついた――。

（ただ……、やりたかっただけ？）

俺はがっかりしつつ、自分の後始末をすると、パンツだけはいて、彼女を見つめた。

（とにかく、真琴さんのことをもっと知ろう）

俺はそう思って、彼女を抱き上げると、ベッドに寝かして自分も横に寝た。

俺の腕枕の上の彼女の寝顔は、楽しそうに微笑んでいる――。

―3―

翌朝、俺は真琴さんより先に目を覚ました。まだぼうっとした頭でトイレを済まし、喉の渇きを何とかしようと思いながら部屋の中を見渡すと、冷蔵庫がないことに気がつき、驚いて一気に目が覚めた。

仕方なくカルキ臭い水道の水で口を濯いでうがいをすると、ぼんやりとテレビを見ながら、彼女が目を覚ますのを待っていた。

彼女は十一時頃むっくりと起き上がると、トイレに入ってその後風呂場に入っていった。

暇を持て余していた俺は、風呂場のドアに耳を近づけ中の様子を伺った。

シャワーの音が聞こえる。

なんとなく覗いてみたくなってドアに手をかけると、鍵が掛かっていて開かなかった。

心の中で舌打ちし、また耳を近づけ中の様子を伺う。

暫くして、歯磨きする音が聞こえてくると、もう直ぐ彼女が出てくるような気がして直ぐにその場を離れ、昨晩と同じように流し台を背にして座り、彼女が出てくるのを待った。

真琴さんは、Tシャツとパンティーを着替えて出てきた。そして、昨晩と同じようにベッドを背にして座ると、タバコをぼんやりとふかし始める。起きてから、まるで俺の存在など気にするそぶりを見せない。

「真琴さん、今日はどうするんですか？」

「……」

全く今までの彼女と変わらない。なんだか、物凄い寂しさを感じた。

真琴さんはタバコを吸い終わると、立ち上がってジーパンをはいた。そして、ポケットにタバコとジッポライターと免許証入れ、そ

れからテーブルの上に置いてあった金をねじ込むと、ヘルメットとバイクの鍵を持って玄関に向かった。
「どこ行くんですか？」
彼女は無言で部屋を出て行った。
外で、バイクのエンジンを掛ける音が聞こえる。
そして、走り去っていくバイクの音が聞こえた。

その日から一週間、俺は彼女のアパートに泊まりこんだ。
彼女の行動を観察するためだ。
彼女の行動パターンは水曜日を除いて全く一緒だった。
午前十一時頃起きて出かけると、深夜の一時過ぎまで帰ってこない。
帰ってくると、テレビをつけビデオを巻き戻し、テレビ台の中に並べてある次のビデオを、ウォッカを飲みながら観る。
ビデオの順番は、チャー、クラプトン、クイーン、ラリーカールトン、そしてジェフベック。それを順番に観ているようだ。
俺が意地悪して、ビデオの順番を入れ替えておくと、彼女はビデオを取ろうとする手を止め、並べなおした。
水曜日は、起きてからタバコをふかすところまでは同じで、その後洗濯機を回したままどこかへ出かける。歩いて行ったようなので不思議に思っていると、俺がバイトをしているコンビニエンスストアーの袋を持って帰ってきた。
買ってきたものは牛丼とウーロン茶だった。それを黙って食べ終えると、洗濯物を部屋干して外へ出て行った。どこかへ出かけたのかと思っていたら、外でバイクを洗っていた。
バイクを洗い終えると、部屋に戻ってタバコを一本吸い今度はバイクでどこかへ出かけた。
夜の九時半頃バイト先から直接真琴さんの部屋に帰ってくると、彼女はいつもの場所に座りギターを弾いていた。俺は彼女が弾いて

いるエレキギターの生音を聞きながら、バイト先から買ってきた牛丼を食べた。
「そろそろ、練習に行かないんですか？」十時を過ぎたところで俺は真琴さんに声を掛けた。すると、彼女は黙ってギターをケースにしまうと、一人で部屋を出て行った。俺はおんぼろスクーターで彼女を追ってクラブハウスへ向かった。

練習が終わり、クラブハウス前の自動販売機の明かりの中にしゃがみ、ぼんやりと一人で缶コーヒーを飲みながら、彼女のことを考えていた。二人は既に帰ってしまっている。
彼女の部屋に寝泊りするようになって、一つだけ彼女が嫌いなこととというか、嫌がることを知った。
彼女はセックスするときにTシャツを脱がない。
俺が無理やり脱がそうとすると、必死にそれを押さえつけて拒む。シャツの中に手を入れるのも嫌がる。
俺はいつも仕方なくシャツの上から彼女の胸を愛撫する。
多分、酷い傷跡でもあって、それを見られるのが嫌なんだろうと思った。
彼女に付き合っている男はいないようだ。かといって、俺が彼女の男になれたわけでもないような気がする。
なんとなく、彼女は誰とでも簡単に寝てしまいそうで嫌だった。自分のことは相当棚の上にあげてはいるが……。

それから暫く彼女の部屋に行くのはやめた。一緒にいても会話が出来ない以上彼女のことを知るすべがないような気がしたからだ。
今日は火曜日だった。学校から帰り、髪を切りにいこうと思って駅前のいつもの美容院へ行くことにした。
歩きながら、彼女のことを考えていた。
まだまだ彼女のことは分からない事だらけだった。とりあえず今

一番知りたいことは、彼女が昼間どこに行っているのかということだった。多分、仕事に出かけているんだろうと思うが、それがどこだか知りたかった。

とにかく、話しが出来ないということが悩みの種だった。俺はそれを何とかできないかと考えながら、駅前の通りを歩いていた。

「山下君！」と突然声を掛けられてハッとした。見ると、同じ学科の美代子だった。

美代子は携帯電話会社のキャンペーンガールのコスチュームを着て、俺に向かって手を振っていた。ミニスカートから剥き出た太ももが目に飛び込んでくる。俺は思わず彼女に近づいていった。

「バイト？」と、俺が訊くと、「そう！」と、彼女は眩しい笑顔で嬉しそうに答えた。

なんだか久しぶりに女の声を聞いた感じがして、彼女の声がとても新鮮だった。

「ねえ山下君、どう？　新しい携帯買わない？」と美代子は俺に新機種の電話機を見せながら訊いた。

俺は、彼女の後ろの棚の、『新規０円』という張り紙を見ながら頷いた。

結局髪を切らずに真琴さんの部屋に来た。早く彼女が帰ってこないか待ち遠しくてしかたがなかった。

俺は機種変更した自分の携帯電話と、それと同じ機種の新規契約で買った携帯電話を並べて見ながら、彼女が帰ってくるのをわくわくしながら待っていた。

ようやく深夜一時近くになり、遠くから真琴さんのバイクの音が聞こえてきた。（来た！）心臓がバクバクと打ち始めた。

彼女は部屋に入ってくると、いつものようにビデオを再生し、いつもの場所に腰を下ろす。そして、いつものようにウォッカを一杯煽ったところで、俺は彼女に話しかけた。

「真琴さん、これ……」

彼女は俺が手渡そうとした、携帯電話を見ようともしない。
俺はむっとして、むりやり彼女に電話機を握らせた。
「これ、プレゼント」俺が電話機を指差して言うと、彼女はちらりとそれを見て直ぐにテーブルの上に置いた。
「なんで！　もう！　ちょっと、いいから持って！」俺はまた彼女に電話機を握らせた。
「携帯の使い方分かります？」
「……」
俺は仕方なく、彼女に電話機の使い方を指導した。
「ねえ、メール打ってみてくださいよ」
「……」
「さっきやったでしょ！」
「……」
（どわあ！　もう！　なんでこんなんなのかなあ……）
俺は彼女があの低くてハスキーな声が、自分に似合わないと思って話さないんじゃないかと思っていた。だから、もしかしたらメールでなら話してくれるんじゃないかと期待していた――。でも……、駄目だった。
俺はふて腐れて、一人でベッドに横になった。
背中でラリーカールトンの演奏を聴きながら、俺はいつの間にか寝てしまっていた。

「真琴さん、これ」翌日彼女が出かけようとするところを捕まえて、彼女のお尻のポケットに携帯電話をねじ込んだ。
彼女は俺がそうするのを黙ってぼうっとした表情で見つめていた。俺は電話機を置いていかれるんじゃないかと不安になったが、彼女はそのまま出かけていったのでほっとした。
俺はそのまま彼女の部屋でぼんやりと、彼女がメールを出してきてくれないかと待っていた。　メールはいくつも来た。でも、彼女以外からだ。俺が学校を休むと、同じ学科の女たちのメールが大量

に飛んでくる。
『光二どうしたの？　私心配……』とかそんなメールばかりだ。
また、メールが来た。どうせまた――、とか思いながら、送信者を見てハッとなった。
「うおお！」と思わず声を出してしまった。
題名は『無題』そして、本文が――、『コウジ、スキ』
「よっしゃー！」俺は立ち上がり、ガッツポーズをしていた。
そして、光二、好き……、という彼女のメールをずっと見つめているうちに、目頭が熱くなってきた。
嬉しかった。嬉しくて嬉しくて、とにかく嬉しくて、本当に本当に嬉しくて――。
小躍りしながら喜んで、彼女に返信しようと思ったときだった。
また、メールを受信した。真琴さんからだった。
題名は『続き』、そして本文は、『ヤキ食べたい』
（ヤキ？）
ヤキと言うものがなんだか分からなかった。
やきそばを打ち損ねたのかと思って、彼女に質問のメールを出したが返事はなかなか返ってこなかった。
俺はいらいらしながら、彼女のメールを待っていた。我慢できなくなって彼女に電話を掛けたが彼女は出てくれない。
（あー、いらいらする！）
むしゃくしゃした気を和らげようと、彼女からの告白メールをもう一度見ようと思った。
『光二、好き』（むふふ……）『光二、好き』（ふふふ……）
『光二、好き』『ヤキ食べたい』（んっ？）
「……」
「ふざけるな！」俺は携帯電話を放り投げた。
「なにが、すき焼き食べたいだ！　間際らしい。まったく、ふざけてる。変なとこで分けて出すな！　つうの！」俺はテーブルの上の

鉄なべを睨み付けながら独り言を言っていた。
彼女のメールを理解出来てから、暫くふて腐れていたが、それでも彼女が意思表示をしてくれたのが嬉しくなってきて、結局バイトを休んですき焼きの材料と、鉄なべと卓上カセットコンロと、なんと肉が腐ると嫌だったので、四十リットルの小さいけれど冷蔵庫まで買ってきて、彼女を待っていた。
真琴さんは六時過ぎにコンビニの袋をぶら下げて帰ってきた。いつもの場所に座ると、コンビニの袋からカツ丼を出して食べようとしたので、俺は慌てた。
「ちょっと！　なにしてんですか！」俺は慌てて彼女からカツ丼を奪った。
彼女は箸を握って、ぼうっと俺のほうを見つめてくる。
「真琴さんが、すき焼き食べたいって言ったんでしょ？」
「……」
俺は彼女を無視して、すき焼きの準備を始めた。
「真琴さん、卵使います？」
真琴さんはぼうっとした目をゆっくりと一度閉じただけで何も答えない。
俺は溜息をついて器に卵を入れた。そして、なべの中から適当に取って彼女の前にその器を置いた。
「どうぞ」と彼女に言って、自分も食べ始めた。
横目で彼女の様子を見ていると、彼女は無言で箸を取って食べ始めた。
「真琴さん、長ネギ、嫌いなんですか」
「……」
「真琴さん、肉好きなんですね？」
「……」
（んっ？）
「真琴さん、長ネギ、嫌いですよね？」
（あっ！）

「真琴さん、肉、好きですよね？」
（おお！）やっと分かった――。
「えっと、真琴さんは女ですよね」
（よし！）
「じゃあ、真琴さんは男ですよね」
「……」
（ククククク……）俺は笑いを必死に堪えた。
ようやく彼女の意思表示の仕方が分かった。彼女は『ＹＥＳ』と答える代わりに、目をゆっくりと閉じる。『ＹＥＳ』ではない場合は目を閉じない。
それから俺は彼女に質問を畳み掛けた。そして、いろいろと彼女のことを知ることが出来た。
身長、スリーサイズ、靴のサイズ、血液型、そして誕生日まで俺の予想通りだった。
さらに、彼女には親も兄弟も親戚もいないということだった。
毎日どこへ出かけているのかは、質問の仕方が難しくて聞けなかった。でも、仕事に出かけているのは確かだった。
そして、一番重要なことを質問しようとした。
「真琴さん、彼氏いますか？」
俺は唾を飲んで彼女の目の動きに注目した。
彼女の瞼は、微妙に閉じかけた――。
（ぐっ！）俺は判断に苦しんだ。
（どっちなんだ？）
深呼吸して、質問を変えた。
「あの……、俺のこと……、好きですか？」
心臓がバクバクしていた。知らず知らずのうちに、彼女が目を閉じてくれるのを必死に願っていた。
彼女の瞼は、ヒクヒクとしてなかなか閉じない――。
（閉じろ！）心の中で叫んだが、結局彼女の瞼は閉じなかった。
俺はがっくりとうな垂れた。

（なんでえ……）食欲が急激に失せた。
「俺……、真琴さんのギター、好きです……」
「真琴さんは、俺のドラム……、好きですか？」
ごくりと唾を飲んで、横目で彼女の目を見つめた。
すると、彼女の目玉がこちらにゆっくりと向きを変えた。そして顔を動かして真っ直ぐに俺を見つめてくる。
俺も顔を動かして、彼女と見詰め合った。
暫くして、彼女の瞼がゆっくりと閉じた。
俺はつい笑みをこぼして、もう一度同じ質問をした。
今度は彼女の瞼が直ぐに閉じた。
とりあえず、今はそれだけで十分だった。それだけでも、十分食欲が復活した。

練習が終わり、先に帰った真琴さんを追って彼女の部屋に戻ってきた。彼女はいつものようにビデオを見ている。俺は直ぐに風呂場へ入ってシャワーを浴びて出てくると、真琴さんにシャワーを浴びるように言った。真琴さんは黙ってビデオを止めると、風呂場へ入っていく。俺は髪の毛の水気をタオルで拭き取り、冷蔵庫からミネラルウォーターを出して喉を潤すと、彼女が風呂場から出てくるのをベッドの上で待っていた。
暫くして、彼女はTシャツだけ着て風呂場から出てきた。下はなにも身に着けていない。そして、俺の横に寝ると目を閉じた。
二度目から、いつもこういう感じで彼女は俺に抱かれる。
でも、結局今夜は彼女を抱くことが出来なかった。
俺のことが好きでもないのに抱かれていると知って、なんだかショックだったからだ。
横で眠っている彼女を見つめた。
眠っている彼女の表情はいつも楽しそうだ。
起きている彼女がこの表情をしてくれたら……。
そして、そんな彼女と声で会話が出来たら……。

彼女の寝顔をぼんやりと見つめながら、そう思った――。

身体を揺すられて飛び起きた。

部屋の中は真っ暗だ。横に誰かが立っていて思わず身を硬くしたが、直ぐに真琴さんだと思った。

「えっ？　あの……、えっ？」

こんな彼女の行動は初めてだったので、俺は混乱していた。

すると、彼女は俺のヘルメットを押し付けてきた。

分けが分からずそれを受け取ると、彼女は玄関を出て行こうとする。俺は慌ててズボンをはいて彼女を追った。

外はまだ暗かった。でも、もうじき夜が明けそうだなと、直感的に思った。

真琴さんはバイクに跨って俺を待っているようだった。

「あの……、後ろに乗るんですか？」俺が自分を指差しながら彼女に訊くと、ヘルメットの中の彼女のぼんやりとした目は、ゆっくりと閉じた。

実は小便がしたかったが、なんとなく彼女が急いでいるような雰囲気だったので我慢して後ろに乗った。

後ろに乗ってつかまるところを探していると、彼女は俺の手を掴んで自分に巻きつかせた。

つい、反射的に彼女の胸を揉んで、にんまりとした途端、彼女は前輪を浮かせながらバイクを走らせた。

（どわああ！）思わず振り落とされそうになって、冷や汗をかいた。

どこへ行くのかと思っていたら、学坂を登り始めた。

それにしても彼女の運転はとんでもない。彼女がバイクを走らせてからずっと、歯を食いしばらずにはいられなかった。

学坂を登り始めてからがもっと凄かった。急な上りのカーブにもかかわらず、カウンターを当てなければ曲がれないほどのスピード

で突っ込んでいく。
（ぎゃあああ！）カーブが迫るたびに心の中で叫びっぱなしだった。
（なんで！）からだが右に振られる。
（こんなに！）左に振られる。
（急いで！）また左に振られる。
（おしっこ！）今度は右に。
（ちびる、うぐ！）思いっきり歯を食いしばった。
大学の入り口が見えてほっとしたのもつかの間、彼女はその前を全開で通り過ぎ、その先の農道へ突っ込んでいった。
細くてでこぼこな農道で、尻を突き上げられるたびに、小便が漏れそうになって、必死に堪えた。
（お願い……、止めて……、漏れちゃう……、漏れるうううう！）
意識が朦朧とし始めたところで、ようやく大学の上を走る県道に飛び出ると、直ぐ横の駐車スペースにタイヤをすべさせながら彼女はバイクを止めた。
「ひいいいいい！」俺はズボンのチャックを下ろしながら、駐車スペースの奥の柵に向かって走った。
（ほううう……）柵の間からナニを突き出し、配下に広がる茶畑に向かって我慢に我慢を重ねた小便を勢いよく放出した。
全身の力が抜けそうだった。はあっと大きく息を吐き、全身で開放感を味わいながら、ゆっくりと目を開けた。
遠くの水平線の上は明るさを増している。その左手には伊豆半島が青白く浮かんでいる。
眺めていると、水平線の一点が小さく光り輝いた。
日の出だ――、と俺は思った。
みるみる太陽が昇ってくる――。
東京の実家を出てここに住み始めてから見る、初めての景色だった。
（こんなにいいところがあったなんて……）俺は日の出に向かって小便の弧を描きながら、彼女からのプレゼントに感動していた。

（携帯のお礼かな？　それとも、すき焼きかな？）
そう思いながら真琴さんの姿を探すと、右手の柵の上に彼女が腰掛けているのに気がついた。
彼女はそこで日の出を眺めているようだった。
彼女の顔に目を向けた。その途端、思わず小便を止めてしまった。
彼女は上ってくる太陽を見ながら微笑んでいた。
太陽の光に照らされて白く輝いている彼女の笑顔に、俺はまるで天使でも見ているかのような気分になった。
（うそ！　うおお！　やった！）
心を躍らせて彼女の笑顔を見ていると、彼女がゆっくりとその微笑んだ顔をこちらに向けてくる。
正面でその笑顔を見られる瞬間を、俺は固唾を呑んで待ち望んだ。
そして、その笑顔が正面に向けられた途端、彼女の視線は俺の股間に向けられ、天使の微笑みは引きつった笑みに変わった。
「あっ！」俺は慌ててからだの向きを変え、残りの小便を必死に放出した。
ちらりと、横目で彼女の様子を伺うと、彼女は柵から降りていて、しゃがんでいつもの無表情な顔でタバコに火をつけていた。
（ちっ！　なんだよ！　別に初めて見るもんじゃないだろ！
しゃぶった事だってあるくせに……。
すいませんね！　雰囲気こわしちゃって！）
俺はふて腐れながら、小便を終えた。
でも、直ぐに嬉しさがこみ上げてきた。
彼女の好きな場所を一つ知ることが出来て、本当に嬉しかった。
俺は水平線に向かい、朝のすがすがしい空気を、肺一杯に吸い込んだ――。
帰りは行きなんか目じゃないくらいの恐ろしさだった。
行きはまだ小便のことで頭が一杯で気が散っていただけだと思った。

「ぎゃあああ！」ガードレールが物凄い勢いで迫ってくるたびに、我慢できずに絶叫していた。
やっと彼女のアパートに着いてバイクを降りると、膝が笑ってしまって暫くあるけなかった。　そんな俺を彼女は無視して部屋の中へ入っていく。
「なんだよつめてえなあ、くそう……。お前知ってんのかよ、茶畑にでも突っ込んで駄目にしたら、ああ？　いくら請求されると思ってんだよ、こら！　ちくしょお！」
俺はもう二度と彼女の後ろには乗らないと誓いながら、おぼつかない足取りで部屋に向かった。
部屋に入ると彼女はベッドで二度寝していた。また、あの可愛い寝顔を見せている。
俺はベッドに方杖をついて間近で彼女の寝顔を見つめた――。
「もう……、なんで寝ているあなたはそんなに可愛いの？」
「はああ――」俺はベッドに背中を付けて座り、大きく溜息をついた。そして、日の出を眺めながら見せてくれた、彼女の笑顔を思い出していた。
俺はそれを見て、彼女にはちゃんと心があると確信した。
初めて会ってから暫くは、あの無表情な彼女に人形のような冷たさを感じることが多かったが、一気に考えが改まった。
本当の彼女を知りたい。
きっと、こうなってしまった理由があるはずだ。
取り戻してみせる。
絶対に取り戻してみせる。
そして俺のことを絶対に好きにさせてみせる。

十一時過ぎ彼女は目を覚ますと、いつものようにシャワーを浴びTシャツとショーツを着替えタバコを一本ふかす。
そして、出かけようとする彼女を俺は追った。
彼女がバイクに跨るとすかさず俺は彼女の後ろに乗った。

彼女が振り向いて無表情な顔を見せると、俺は笑みを見せて返した。
前輪を浮かせて走り出すと、俺は振り落とされないように彼女に必死にしがみついた。
彼女はバイパス道路を西に向かった。
こんな時間なので交通量も多いし信号もあるためか、暫く彼女の運転は大人しかったが、信号が暫くないところに出ると、そこからがまた凄かった。
大型トレーラーが並んで走っている僅かな隙間を、全く減速することなくとんでもないスピードで突っ込んでいく。
もう、勘弁してくれと何度も心の中で叫んでいた。
朝、二度と彼女の後ろに乗るのはやめようと思ったが、彼女がどんなところで働いているのか知るためには、これしか方法がないと思った。
もう、これが最後だと呟きながら、必死に彼女の細い身体にしがみついていた。

俺たちが住んでいるところの最寄駅から、二駅隣の駅近くにある古びた小汚いビルの裏に彼女はバイクを止めた。
降りるとまた膝が笑っていたが、彼女を見失わないように必死に後についていった。
彼女はバイクを止めたビルの裏口から入り階段を上がっていく、そして二階に出ると直ぐ横のドアを開けて中に入っていった。
彼女が入ったドアの前に立つと、そこは個室ビデオ屋の入り口だった。
こんなところで何を？　と思いながらドアを開けたが、彼女の姿は見えなかった。
首を突っ込んで中を見渡しても彼女の姿は見えない。
正面のカウンターの奥に、扉が開いたままの部屋が見える。
仕方なく、俺はゆっくりと中に入り、その部屋を覗いてみること

にした。
扉に近づくと、彼女がソファーに座って食事をしている姿が見えた。よく見ると、食べているのは牛丼だった。
恐る恐る部屋の中を覗いて驚いた。あの頭は間違いない。
「敦司さん！」
部屋の奥の机に向かっていた敦司さんがこちらに振り向いた。眉毛の動きで彼が驚いているのが分かった。
「敦司さん！　何やってんですか？」
「あん？」敦司さんは今度は不思議そうな感じに眉毛を下げて、俺に部屋に入るように言った。
俺は部屋の中に入ると、真琴さんの隣に座った。
「ここは俺の店だよ」
「マジっスか？」
「まあ、正確にはウチのかみさんのもんだけどな」
「はあ、そうなんですか」
「で、何やってんの？」
俺は返答に困ってしまった。
「いや……、たまたま、あの……」
「何がたまたまだよ、あん？」
もう、開き直るしかなかった。
「あの、真琴さん、ここで何やってんですか？」
「関係ねえよ、お前には」
「なんでですか！　おんなじバンドのメンバーじゃないですか！知りたいんスよ、いいじゃないスか知ったって」
俺が興奮して言うと、真琴さんは牛丼を食べ終えて立ち上がった。そして部屋を出ていく。
俺は彼女が気になって腰を上げようとした。でも敦司さんに声をかけられ、仕方なく彼の方を見た。
「お前の周りにはよ、いっぱいいるじゃねえか、もっと普通でピチピチの可愛い女どもが――。それでいいじゃねえか。何が不満なわ

け？　なんであいつなわけ？」
「真琴さんだって可愛いスよ」
「はあ？　お前めんたま腐ってんじゃないの？」
俺はむっとして答えなかった。
「あれどうしたよ、マキだっけ？　お前狙ってたろ？　あっちのがムチムチでボインボインで全然いいじゃねえか。あんな無表情の能面女よりよっぽどましだろ？」
「なんでなんですか？　俺は普通に真琴さんと付き合いたいだけなんですよ」
「普通になんか付き合えねえよ」敦司さんは呆れたような口調で言った。
「そんなのわかんないじゃないですか」
「わかんの」
「そんなの……、とにかく理由も分からずに諦められないッスよ！」
「お前が手におえるようなヤツじゃないの」
「だから、なにがですか！」
敦司さんは眉毛を思いっきり下げて溜息をついた。俺は下唇を噛み、敦司さんを少しにらみながら彼の言葉を待った。
「とりつかれてんだよ」
「はあ？　たたられたりしますか？」俺は鼻で笑いながら訊いた。
「そんなんで済めばいいけどな」敦司さんはしんみりとした口調で言った。
「馬鹿らしい……」俺はそう言って立ち上がった。
「とにかく、ケガしないうちにあいつの傍にいるのはやめたほうがいい」と敦司さんが凄く真面目な口調で言ったので、俺は彼の顔を見た。
「俺はマジで忠告してるんだからな。そのカッコいいイケメンがぐちゃぐちゃにならないように、あんまりあいつの傍にはいないほうがいい」
そう言うと敦司さんは机に向かい、その上のパソコンを操作し始

めた。
（自分はどうなんだ）と俺は言いたかった。
自分は毎日彼女の傍にいるくせに、何を言っているんだと俺は思った。正直言って彼女を自分の店に囲っている敦司さんに嫉妬したし、ひょっとして彼女が俺にとられるのが嫌でそんなことを言っているんだろうとも思った。
（奥さんがいて、子供も生まれるって言うのに。真琴さんを独り占めにしようなんて冗談じゃない）
俺は黙って部屋を出て、店の受付カウンターの中に座っている彼女の隣に座った。
客なんて全く来そうになかった。正直、いまどきこんな店がやっていけるとは思えなかった。
「暇ですね」隣でタバコをふかしている真琴さんに言ってみたが、彼女は目で頷かず、カウンターの下の機械のスイッチを入れた。すると、店の中に黒人系女性のソウルフルな歌声が、静かに流れ始めた――。
「いつもこんな感じなんですか？」
彼女は目を閉じた。
その後いくつか質問をしてみると、客は多いときで一日に十人くらいらしい。でも、全く来ない日が殆どらしかった。俺としてはこんなところに客が来るほうが驚きだった。
あまりにも暇なので、個室を除いてみた。三畳ほどの個室の中にテレビとビデオデッキがあり、一人掛けのソファーが置いてある。ソファーの後ろの棚に、ビデオやＤＶＤのソフトが並んでいた。その殆どがアダルトものだった。
椅子からずり落ちそうになり、目を覚ました。居眠りしていたらしかった。隣を見ると、真琴さんはぼんやりとタバコをふかしている。俺はほっとして、よだれを拭って立ち上がると、腰を伸ばした。携帯電話で時刻を確認すると、午後の六時を過ぎていた。

彼女がいつも帰ってくる時間を考えると、まだまだ先は長そうだった。俺は溜息をついて座りなおした。すると、敦司さんの呼ぶ声が聞こえて振り向いた。
「お前、カツ丼でいいか？」
「へっ？」
「晩飯だよ。それとも帰るか？」
「いや、いただきます。いいですカツ丼で」

事務室のソファーで真琴さんとならんでカツ丼を食べていた。正面では敦司さんも同じものを食べている。
「あの――」敦司さんに向かって声を掛けた。
「ん？」敦司さんは不思議そうに眉毛を動かして見せる。
「こんなんで、やっていけるんですか？」
「別にこれだけで食ってるって分けじゃないから」
「はあ……」
「他にラブホを三つ持ってる。そっちがメインだな。まあ、それもかみさんのもんだけどな」敦司さんはそう言ってにやりとすると、食事を続けた。

（ぐおお！）立ち上がって思いっきり伸びをした。時刻は午後十時、帰るまでまだ暫くある。今日はまだ一人も客がこない。正直言ってもう帰りたかった。真琴さんと話をしたくても、こちらが一方的に質問するだけで彼女の声を聞くことは出来ないし、心配していた仕事も、人と話をしない彼女にとっては、この仕事はうってつけのような気がした。
それにしても何が楽しくて毎日生きているのか――。
こうやって一日中座って有線放送を聴き、たまに来る客の相手をして、帰るとビデオを見ながらウォッカを引っ掛けて寝るだけだ。
（ううむ――）腕組みをして考え込んでいると、客が一人入ってきた。入ってきた男を見て三十歳は超えていると思った。ぼさぼさの

髪型で、無精ひげを生やしている。
「いらっしゃいませ！」つい、自分のバイトの感覚で挨拶してしまった。俺に挨拶された男は驚いて一瞬立ち止まると、俺のことを気にしている様子で、おどおどしながら真琴さんの前に立った。
男は俺のことをちらちらと伺いながら、真琴さんの前に三万円を置いた。
（えっ？）個室は一時間千円で借りられる。なのになぜ三万もと思っていると、男は握った手の人差し指と中指の間から親指を出して真琴さんに見せた。
真琴さんはぼんやりとその手を見ているだけだ。俺はなんだかよく分からなくて、黙って見ていた。すると、男はさらに一万円を置いてまたあの手を見せる。それでも真琴さんの様子は変わらない。
男は溜息をついて、更に一万円をテーブルの上に置いてまたあの手を見せた。
すると、真琴さんはテーブルの上の金を鷲掴みにしてポケットに入れると、すくっと立ち上がって個室に向かっていった。男はやれやれというような表情で、彼女についていく。
二人は個室の中に入っていった――。
なんだか物凄く嫌な予感がした。まさか、まさかと思いながら二人が入った個室のドアに耳を近づけた。
ごくりと唾を飲んだ――。身体が震えているのに気がついた――。
彼女は、売春していた――。

「そんなことくらいでショック受けてたら、あいつと付き合えねえぜ」敦司さんの声にハッとした。気がついたら、事務室のソファーに座っていた。
「なんで！」張り上げた声は裏声ってしまい、俺は唾を飲んだ。
「やめさせてくださいよ！」
「しらねえよ、あいつが勝手にやってることだ」敦司さんは机のパソコンを操作しながら言った。

（冗談じゃねえ……。冗談じゃねえぞ！）俺はぐっと奥歯を噛み締めた。
　ようやく分かった――。真琴さんは帰るとポケットの中身を全部テーブルの上に出す。たまに大金をテーブルの上に置くのを見て、俺はそれは給料だと思っていたがそうじゃない。なぜなら、二日ほど続けてそういうことがあったからだ。だから心配だった。彼女がどんな仕事をしているのかずっと知りたかった。なんとなく予感はしていたが、まさか身体を売っていたなんて……。
　個室から二人が出てくる様子がした。部屋の外を見ると、あの男が満足そうな表情をして帰っていく。俺は、自分と彼女のヘルメットを掴むと立ち上がった。
「おい！　光二！」
　俺は敦司さんの声を無視して部屋を出ると、真琴さんの腕を掴んで店を出た。
　ビルの裏口を出ると、ヘルメットを彼女の頭にねじ込んで自分のヘルメットを被ると、彼女のポケットからバイクの鍵を取り出した。そして、彼女のバイクに跨る。
「真琴さん乗って！」
　真琴さんはぼうっと立っている。
「早く乗って！」彼女の腕を引いて強く言うと、彼女はゆっくりと俺の後ろに跨り、俺にしがみついた。
　途中数回エンストしながらようやく彼女の部屋に帰ってきた。部屋に入ると、彼女はいつもの行動をとる。俺は先にシャワーを浴びて、それから彼女にもシャワーを浴びさせた。
　その後、直ぐに彼女を抱いた。何度も、何度も――。
　部屋の中が少し明るくなってきた。俺は彼女の目を見つめて言った。
「もう、俺意外としないで……。金は俺が何とかするから……」
　彼女はゆっくりと目を閉じてくれた。嬉しかった。ほっとして、ようやく眠りに就くことが出来た。

―4―

俺は自分のアパートを引き払うことにした。家賃を浮かせてその分を彼女にあげるためだ。バイトの時間も少し増やしてもらうことにした。少しでも金を稼ぎたいがためだ。

そうして、俺は真琴さんと一緒に住むことにした。

彼女の部屋に必要最小限のものを持って引っ越してくると、小汚いこの部屋を何とかしようと思い掃除を始めた――。

カラーボックスの中を整理しているときだった。雑誌の間に写真たてが挟んであったので、俺はそれを何気なく取り出した。

「あっ！」思わず声を上げた。

薄い水色のワンピースを着た、真琴さんの眩しい笑顔が飛び込んできた。彼女は今と違ってショートカットで、本当に可愛かった。これが本当の彼女の姿だと思った。俺はこの笑顔が見たくて見たくて、ただそれだけのために彼女の傍にずっといたような気がした。

写真の中の彼女はベンチに腰掛けて、隣に座っている黒い革のジャンパーを着た男に腕を絡めていた。その男の顔を見てみて、息を呑んだ――。

死んだと教えられた『浩二』さんだった。

（そうか……、浩二さんと付き合っていたのか……）

彼女の左手首の傷跡を思い出した。彼女が今のようになってしまったのは、浩二さんが死んだことと関係があるのではないかと俺は想像した。それくらい、浩二さんの隣に写っている彼女は幸せそうに見えた――。

あれ以来俺は、真琴さんが家に帰ってくると所持金をチェックするのが癖になっていた。身体を売っていれば五万円以上持っているはずだ。でも、彼女は持っていった金より多くの金を所持していることはなかった。それを確認して、俺はとりあえずほっとする日々

を送っていた。
　真琴さんとの同棲生活は平和な日々だった。というか平和すぎて退屈になり始めていた。毎日が同じことの繰り返しで、正直言って焦りを感じていた。彼女と同棲を始めてかれこれ一ヶ月近くがたとうとしているのに、彼女は相変わらず目配せ以外で返事をしようとしない。彼女が休みの日にゲームセンターやボーリングやクラブに連れて行ったりしたが、まったく楽しそうな表情を見せてくれることはなかった。何をどうすれば彼女が喜んでくれるのかが、全く分からなかった。
　それでも諦め切れなかった。彼女が笑顔で自分と会話をしてくれるにはどうすればいいのか――。彼女と浩二さんの写真を見るたびにそれを考えずにはいられなかった。
　土曜日、午前中に洗濯と掃除を済ますと、バイトに行く前に押入れの整理をしようと思い立った。
　押入れを開けてみてまず驚いたのは、そこにはなぜか小さな冷蔵庫が置かれていた。他にはバイクのタイヤやハンドルやマフラーが入っていた。要するに、ガラクタ置き場だと思った。
　他に何が入っているかと見ていると、まだ栓の開けられていないバーボンとウイスキーが数本出てきて、俺はもったいないと思ってそれを部屋の中に移した。他にあるものと言えば、鍋やフライパンなどだった。俺はいつかそれらを捨てようと思いながらふすまを閉じようとして、冷蔵庫と横の壁の隙間に本が挟み込まれているのに気がつき、それを引っ張り出してみた。
　本かと思ったらそれはアルバムだった。中には浩二さんの写真ばかりが納めてあった。悔しいけど、浩二さんはいい男だった。俺は心の中で舌打ちせずにはいられなかった。
　浩二さんがカワサキの黒いバイクに乗っている写真があった。それを見て思わず、俺は同じバイクを買おうかと考えたりしていた。
　真琴さんが写っている写真が二枚だけあった。どちらも今とは見違えるほど明るい表情をしている。一枚はベッドに腰掛けてアコー

スティックギターを抱えてピースサインを見せている写真。もう一枚は浩二さんと並んでバイクに跨っている写真。真琴さんのＣＢＸは今と違って改造していなかった。その写真は二人でツーリングにでも出かけたときの写真のようだった。二人とも後ろに大きな荷物を乗せている。

（ツーリングかあ……）俺はふと思い立って携帯電話を取り出した――。

その晩真琴さんが帰ってくると、俺は真琴さんに言った。

「ねえ、俺の写真欲しくない？」

真琴さんの目はテレビのほうを見たまま閉じなかった。

（ぶー）俺はむくれてテレビに目を向けた。今日のビデオはクイーンだった。

もう一度真琴さんに目を向けると、彼女はウォッカを手に取った。

「ねえ、俺さあ、もう直ぐ夏休みだからさ、休みに入ったら二人でツーリングに行かない？」

彼女はウォッカを注ごうとしていた手を止めた。

（おっ！）

「あのね、山中湖に叔父さんの別荘があるの。そこ、借りられることになったんだ、だからさ行こうよ、ツーリング」

真琴さんはゆっくりとウォッカのビンを置いた。そして俺に顔を向けてくる。彼女は俺と目が合うとゆっくりと目を閉じた。

（よっしゃ！）

「行きたい？　ツーリング？」

彼女は直ぐに瞬きをすると、微笑んだ――。

「えっ？」心臓がバクバクし始めた。喋ろうとしたけど口の中が思いっきり乾いていて、俺は必死に唾を飲んだ。

「あっ、あの――。い、行きたい？　ツーリング」

彼女は首を縦に動かして頷いた。そしてまた微笑んで見せる。

「うおお！」俺は絶叫して彼女を抱きしめていた。

その晩俺は彼女を三度抱いた。とにかく興奮して仕方がなかった。彼女も、今までになく濡れていると思った。
横で楽しそうな寝顔を見せている彼女を見つめながら思った。
彼女は心の病に犯されているんだ。こうやって、少しずつ彼女に近づいていこう――。焦っちゃ駄目だ。そうしているうちに、きっと俺に心を開いてくれる。そしていつかは、俺と普通に話をしてくれる。
きっと……。きっとそうだ――。

ツーリングに行くことが決まってから、少しだけ真琴さんが明るくなったような気がした。たまに、風呂場から真琴さんの口笛が聞こえてきたりする。
それと、仕事先ではどうだか分からないが、家にいる間はタバコと酒をやめているようだった。
ツーリングに出かける前の晩、彼女は早めに仕事から帰ると時折口笛を吹きながらバックに荷物を詰めていた。俺はそんな彼女を笑いを堪えながら見ていた。
（むふふ――、そんなに行きたかったのか――）
俺はこの旅行で彼女が少し変わってくれるような予感を感じていた。
そんなときだった――。
彼女が突然手を止めて流し台のほうの窓に顔を向けた。
彼女は少し顔をこわばらせている。俺はなんだか不安になった。
「どうしたの？」と声を掛けた途端、彼女はビクッと少し腰を浮かせるほど驚いた。そして、おもむろに立ち上がりおろおろとしている。顔がみるみる青ざめていくようだった。
「えっ？　ちょっと、なに？」俺が彼女の傍へ近づくと、彼女は窓のほうを見たまま俺の腕を強く握った。彼女は小さく震えている。

そんな彼女を不安に思っていると、遠くからバイクの音が近づいてくるのに気がついた。ドッドッドッドッという低い音で、単気筒のバイクだと思った。

「うわああ……」彼女は声を漏らして俺にしがみついてきた。

バイクの音が近づいてくるにしたがって、鼓動が激しくなっていくのを感じた。恐怖におののく彼女を見て自分までなんだか怖くなってきた――。

（一体全体何が来るって言うんだ……）

ダダダン！　ダダダン！　とひときわ大きな単気筒のバイクが聞こえてくると、窓の外が明るく照らされた。

俺は彼女を抱きしめて、唾を飲んだ。すると、バン！　とピストルでもぶちかましたような物凄いバックファイヤーの音がして、彼女は飛び上がって驚き、俺に思いっきりしがみついてくる。

気がつくと、バイクの音は止んでいた。窓の外の明かりも消えている。

耳を澄ますと、コツ――、コツ――と、足音が徐々に近づいてくる。

玄関のドアノブがゆっくりと回った――。

「ううわあああ……」彼女の震え方は尋常じゃなかった。

キイーっと耳障りな音を立ててゆっくりと玄関のドアが開き、黒いランニングシャツに、黒のズボンをはいた、鍛え上げられた体系の背の高い男が入ってきた。

男は玄関に入ると、立ち止まってこちらを見た。なんとなく見覚えがあるが、真っ黒なサングラスを掛けていて誰だか思い出せなかった。

「だ、誰だよ！　あんた！」俺は真琴さんを後ろに隠して言った。

男はゆっくりと、サングラスを外し始めた――。

「うわあああ！」思わず叫んでしまった。俺は目を疑った。（幽霊？）そう思って、目を瞬きながら男の顔をよくみた。

間違いなかった。死んだはずの浩二さんだった。

「なっ、なんで……、なんで……」
浩二さんはにやりと口元を緩めると、俺をにらみつけながら靴も脱がずに近づいてきた。
ちょっと待てと言おうとした途端、顔面に激痛が走って目の前に火花が散った。次の瞬間今度は腹に衝撃が走って床に膝を落とした。視界が歪んでいる。息が出来ない。口の中が血で一杯になっていく。
「ぎゃあああ！」真琴さんが、だみ声で叫んだ。
俺は息を吸い込もうと必死になりながら、彼女の姿を探した。
後ろに浩二さんが立っていると思った。焦点がなかなか定まらない。
ようやく目がはっきりすると、浩二さんが立ったまま丸裸の真琴さんを抱きかかえ、ガンガンに腰を振っている光景が目に飛び込んできた。
俺が慌てて立ち上がろうとすると、「きょええ！　ひゃあ！」と言った感じの奇声を上げながら更に腰をガンガンに突き始める。
狂っていると思った。表情が完全にいっていると思った。俺は物凄く恐ろしくなって動けなかった。
また、「きょええ！　ひぇ！　ひぇ！　ひぇ！」と言う奇声を張り上げながら、真琴さんの背中をえぐるように引っかき始めると、「ぎゃあああ！」と真琴さんが苦しそうに、だみ声を張り上げた。
止めなきゃと思っても身体が動かなかった。完全にビビッていて、どうしようもなかった。
何も出来ない自分が情けなくなった。狂ったヤツの表情と、ヤツに犯されている彼女を見るのが嫌でその場に蹲りきつく目を閉じた。ヤツの気味の悪い奇声と、真琴さんの悲痛の叫び声を聞くのが嫌で、両手で耳をふさいだ。
そうして心の中で、必死に何かに助けを求めていた――。
目の前にどさりと何かが落ちる音を聞いて前を見た。

「真琴さん！」彼女が目の前に横たわっていた。背中に酷い引っかき傷が無数に出来ていた。彼女の背中は悲惨だった。今出来た傷だけでなく、過去に出来たと思えるような赤黒いみみずばれのような傷が背中を埋め尽くしている。それだけではない、ただれた酷いやけどの跡も沢山あった。

それらはすべてヤツにつけられたものだと思って、浩二のヤツを睨み付けようと顔を上げた。その瞬間、顔面に何かが飛んできて、よけようと思ったときには、目の前に火花が散って後ろに吹っ飛ばされた。俺は後頭部と背中を思いっきり打ちつけ床に蹲った。意識が朦朧とし始めた俺をヤツは容赦なく蹴りつけてくる――。

殺され……。

よかった、生きてる……、と思った。ゆっくりと目を開けてみて、もう夜が明けていると思った。

全身のずきずきとした痛みを堪えながら身体を起こすと、目の前に真琴さんが全裸でうつ伏せに倒れていた。

まさか死んでるんじゃないかと思いながら、慌てて向こう側に向けている顔を覗きこんだ。彼女は息をしていてとりあえずほっとして、背中の傷の様子を確認しようと目を向けた。

背中の傷は、血は止まっているが目を逸らしたくなるような酷いものだった。

俺は彼女をその場から動かさず、毛布だけ掛けてあげると風呂場に行って血だらけの顔を洗った。鏡を見ると顔面はボコボコに腫れていたが、歯も鼻もとりあえず折れていないことにほっとすると、服を着替えて外に出た。

時刻は七時半だった。店はまだやっていないと思い、近くのサークルの仲間のアパートに向かった。仲間は俺の顔を見て物凄く心配してくれたが、俺は急いでいると言って、そいつから消毒薬などを借り真琴さんのところへ急いだ。

彼女のアパートに戻ると、彼女は起き上がってタバコをふかして

いた。服はまだ身につけていない。
俺は彼女の後ろに回り背中の手当てを始めた。
「痛い？」
「……」
「大丈夫？」
「……」
背中の手当てを終えると、彼女にTシャツを着せてあげた。彼女はTシャツを着る順番が決まっていた。今日は水色にサーフボードのプリントが入ったTシャツのはずだったので、俺はそれを着せて、ショーツもはかせた。
そして、真琴さんの表情を伺った。
ハッと息を呑んでしまった――。
彼女の目はうつろで、焦点が定まらないといった感じだった。初めて会ったときのほうがまだ生きた目をしていたと思った。今は全く生気が感じられない。
「あ、あの……、ごめん……、俺……、助けてあげられなくて……」
彼女は無表情のまま、ぼんやりと次のタバコに火をつけた――。
ショックだった。ようやく彼女の心に手が届きそうだと思ったのに、振り出しどころではない、もっと遠くへ行ってしまったような気がした。

とぼとぼと歩きながら、薬を返しに仲間のアパートへ行き、その後食べ物を買おうと思ったが、バイト先のコンビニへ行くと顔の傷のことをあれこれ聞かれそうで嫌だったので、少し遠出をして牛丼屋で牛丼を二つテイクアウトして彼女のアパートへ向かった。
（とりあえず、ツーリングはお預けだな……）
それにしても――と思った。昨日の男は確かに浩二さんだった。敦司さんはなぜ嘘をついたのか――、それが知りたかった。嫌、問い詰めて必ず聞き出そうと思った。
彼女のアパートの前に出てハッとした。

彼女のバイクがなかった。

彼女の仕事先のビルの裏に着くと、彼女のバイクがあった。俺は急いで階段を上がり、個室ビデオ屋のドアを思いっきり引いて中へ駆け込んだ。

彼女が座っているカウンターの前に立ち、肩で息をしながら彼女の顔を見ると、彼女はゆっくりと立ち上がって、個室に向かった。そして、個室のドアを開けて待っている。

「い、いや……、俺、客じゃないから……」

そういうと彼女は黙ってカウンターに戻って腰掛けると、タバコに火をつけた。なんだか、俺のことを忘れてしまったような感じがして、物凄く悲しくなってきた。

「あの、俺、光二――。分かるでしょ？」

彼女の目はぼんやりと見つめ返してくるだけだった。

（マジかよお……）

「おい、光二」敦司さんが事務室の入り口から手招きしていた。

俺はむっとしながら事務室へ向かった。

「敦司さん！　どういうことっスか！」入ると俺はいきなり怒鳴った。

「まあ、座れよ」敦司さんは眉毛をたれ下げて言った。

俺がむっとしながらソファーに座ると、敦司さんも反対側に腰掛けた。俺は、彼を睨みつけながら彼の言葉を待っていた。

敦司さんはゆっくりとサングラスを外した。敦司さんの目は凄いたれ目で優しそうだった。俺はあまりにも意外な彼の素顔に唖然としてしまった。

「あいつ来たみてえだな……」敦司さんはぼそりと言った。

俺は彼の素顔を見てから、怒りが少し収まっていてしまった。

「ん？」敦司さんは俺にどうした？　と言うような表情を見せた。

「あ、あの……、死んだんじゃなかったんですか？」

「ん？」敦司さんは不思議そうな顔をした。

「浩二さんですよ！　昨日来たんですよ、なんで嘘ついたんですか」
「浩二は死んだよ。嘘はついてねえ」
「まだそんなこと……」
「おめえが昨日見たヤツは、浩二の双子の兄貴だ」
「双子？」名前は浩一（こういち）だと敦司さんは教えてくれた。
（そういえば、肩に刺青がなかった……）
「もう……、ほんとのこと、教えてくださいよ……」
「そんなにされても、まだ真琴に気があるのか？」
「決まってるじゃないですか！」
「そんなもんで済んだから、いいようなもんだと俺は思うけどな」
「そんなもんって……、こんなにされてるのにですか？」俺は体中の傷を見せて敦司さんに言った。
「生きてるじゃねえか」
「……」
「あいつの場合は、逆に殺されちまったけどな……」
「殺された？」
「……」
「誰が殺されたって言うんですか？」
「……」
「敦司さん！」
「……、浩二だよ……」敦司さんはそう言って大きく溜息をついた。
俺は、暫く絶句した――。
「あの……、浩二さんがあの浩一ってヤツに殺されたって言うんですか？」
「ああ……」敦司さんは俯いて答えた。
「でも、あいついるじゃないですか？　なんで？　警察は？」
「証拠がないんだよ……、でも、それしか考えられねえ……」
「いいか、昨日の事だって、警察に訴えたって、多分あいつは捕まらないぜ。真琴はあんな調子で、お前、警察に証言させられる自身あっか？　真琴が警察に訴えると思うか？」

確かに、真琴さんは乱暴されたことを警察どころか、誰にも話すことはないだろうと思ったし、話させるのも難しいと思った。
「それに、万が一ヤツが捕まったとしても、婦女暴行や傷害程度じゃ意味ねえんだよ」
「どういうことっスか？」
「死刑か無期懲役でも食らってくれなきゃ、ヤツはまた必ず真琴のところに現れる。そういうヤツなんだよ」
「じゃあ！　真琴さんを見捨てろって言うんですか？」
「そんなこと言ってねえ……」
「えっ？」
「あいつは今のままでも、十分幸せなんだよ」
「そんな馬鹿な」
「あいつは今に生きてねえんだ」
「えっ？」
「あいつの寝顔……、見たことねえのか？」
（要するに……、現実逃避してるってことか？）
「なあ、光二」
俺は顔を上げて敦司さんを見た。敦司さんは寂しそうな目をしている。
「もう、あいつにちょっかいだすな……」
「でも……、俺は……」鼻の奥がツンとして話せなくなった。
「お前の気持ちも分かるけどな、どうにもなんねえこともあるんだよ。あいつと深く付き合っても、ぜってーいいことなんてねえ。お前にとっても、真琴にとってもな」
悔しさが胸の奥からこみ上げてきた。本当にどうにもならないのだろうか――。あいつが現れる直前までは、真琴さんは本当にツーリングに行くのを楽しみにしていた。真琴さんは本当は、現実を捨ててなんていないと思った。
「俺……、諦めない……」
「光二……」

「お願いします！　教えてください！　俺、彼女のことなら何でもします！　お願いします！　教えてください！」
「……」

「あいつは、捨て子だったそうだ……」
俺が土下座までして訴え始めたのを見て、敦司さんは見かねたように話し出した。
「浩二があいつを連れてきたのは、あいつが十八になる日のクリスマスイブの夜だったよ。路地裏でアコースティック一本でストリートやってるとこを浩二が見つけて連れてきた。いいもん拾ったとかいうから、見たら小汚い娘でよ、なんかくせえし、俺は直ぐに捨てて来いって怒鳴ったんだよ。そしたら、こんな金の卵捨てられるかって言い返しやがってよ。俺はとにかく興味が沸かなかったから、好きにしろってそんときはほっといたんだけどよ――。そしたら、浩二のヤツ知り合いのスタイリストやら美容師の卵たちに頼んで、真琴のことぴかぴかに変身させちまってよ、驚いたぜ――。アヒルの子が白鳥になりましたって感じだったな……」
そこまでしんみりと話していた敦司さんの表情が少し和らいだ。
そして、
「もっと、びっくりしたのはあいつの歌だ。お前もあん時の真琴の歌聴いたら、びっくりするぜ」と、目を輝かせて言った。
「聴きたいか？」
勿論俺は頷いた――。
敦司さんは机の引き出しから一枚のＭＤを取り出し、コンポにセットした。
スピーカーから流れ出る歌声を聞いて、俺は唖然とした。
俺が知っている真琴さんの声ではなかった。透き通って、伸びやかで、とてもハイトーンだ。
とても彼女が歌っているとは思えなかった。

クックック……と、敦司さんの笑い声が聞こえた。
「信じらんねえだろ」
俺は頷いた。
「俺もあいつの歌初めて聴いたときは、今のお前とおんなじで口あんぐりって感じだったぜ」
俺は苦笑いを返した。
「でも……、もう聴けねえけどな……」
確かに、この歌声を取り戻させる自信は沸いてこなかった。俺は切れた下唇を思わず噛んで、顔をしかめた。
敦司さんは大きく溜息をついて話を続けた。
「とにかく、そんとき俺たちは、多分お前が見たって言うバンドを解散した後でよ、面子探してたんだよ。だから、あいつの歌聴いたときは、ほんとに嬉しくてよ、直ぐに三人でやることに決まった」
敦司さんは立ち上がって、コーヒーを二つ持ってきた。俺は一つ受け取り、口の中がしみるのを我慢してそれを啜った。
「問題は、ギターだったんだ――。あいつはアコギしか弾いたことがなかったし、もともとあんまり上手くなかったから大変だったぜ、浩二が今あいつが使ってるムスタング買ってきてよ、俺が付きっ切りで色々教えてよ、あいつは浩二の言うことは素直に聞くくせに、俺がなんか言うと黙れハゲとか言いやがって……」そういいながら、敦司さんはスキンヘッドを撫でた。そして、話を続けた。
「そんでもってあいつ意外と短気なんだよ、んだからちょっと指摘すると直ぐむっとして口げんかになってよ、なんとかさまになるまで半年はかかったな……」と最後はぼやくように言った。
「羨ましいっス……」俺は呟いた。
「んっ？」
「真琴さんと話できて……」
（ぐっ！）鼻の奥がツンとしたのを奥歯を強く噛んで堪えた。
「昔の話だよ……」
「はい……」

「ようやく、バンドらしくなった頃だった……」敦司さんは少し間をおいて話し出した。
「俺の部屋で浩二と徹夜で曲作りして、朝、浩二が帰った後寝てたんだよ。そしたら、浩二から電話が掛かってきてよ、真琴が大変だから直ぐ来てくれって言われて、そん頃あいつら同棲してたからよ、で、急いでいったら真琴のやつベッドで手首切っててよ……」
俺はごくりと唾を飲み込んだ――。知りたかったことの一つだった。
「浩二も俺も、何がなんだか分からなくって、とにかく病院へ担ぎ込んだんだ――」
敦司さんはそこまで言って、タバコに火をつけた。そして、暫くタバコをふかしていた。俺はぼんやりと、彼の吐き出す煙を眺めながら、話の続きを待った。
「手首の傷はたいしたことはなかった。まあ、傷跡はしっかり残っちまってるがな。とにかく死ぬほどのことじゃなかったんだけど、理由がわからねえ……」そう言って敦司さんはタバコを揉み消した。
「浩二が訊いても、俺が訊いても、一切だんまりでよ……。なんとなく浩二のことが関係ありそうな感じがしたんで、ヤツがいねえときに浩二にはぜってーいわねえからって言っても、頑として口をわらねえ……」
「浩二も暫くそっとしとけって言うからよ、仕方ねえからそん通りにしてたんだよ、でも、いつまでたっても元気でねえし、なんだか練習にも身がはいんねえみたいでよ――」そこまで言って敦司さんはコーヒーを啜った。
「浩二はよ、バンドとそれ以外のことをきっちり分けるヤツなんだよ。ほんと、バンド馬鹿でよ――。だから、真琴だからって甘いことなんていわねえヤツなんだけど、それでも暫くは我慢してたんだよ……、でも、さすがに訳も言わずにいつまでも気のねえ演奏してる真琴に、ついにぶちきれちまったんだよ……。いきなり演奏止め

て、やる気がねえならやめちまえ！　って怒鳴ってよ……」
俺は唾を飲み込んで、「それで真琴さんは？」と訊いた。
「大泣きだよ……」
「浩二はとにかくバンドに関することには鬼なんだよ。泣こうがわめこうが関係ねえ……。バンドやってるときと、やってねえときが違いすぎるんだよ……」敦司さんは大きく溜息をついた――。
「浩二が真琴のことつまみ出そうとするのを何とか止めてよ、真琴にとにかく訳を話せって言ったんだよ。そんでもって、ようやく口を割りやがった……」
「何だったんです？」
「浩二を裏切ったって言うんだよ……」
「浩二さんを？」
敦司さんは頷いた。
「手首を切った夜によ、ベッドに誰か潜り込んできたんだけど、てっきり浩二だと思ったんだと、とにかくあんまりにも浩二そっくりだったんで、そう思っちまって……」
「まさか！」
「そういうことだ……」
俺はまた、切れた下唇を噛んで顔をしかめた。
「直ぐになんか変だって思って、ふと肩に刺青がねえってことに気がついたときには、直ぐにでも舌噛んで死のうと思ったって……、でも、あいつにぶん殴られて意識が朦朧としちまって、そのままやられたらしい……」
「俺も、そん時は浩一の存在なんて知らなかったから、よく分からなかったんだよ。でも、浩二はそこまで聞いて納得したみたいでよ、俺らに浩一のこと教えてくれた――。そんでもって、真琴に土下座して謝ってたよ……」
「何で浩二さんは双子の兄弟がいたこと、教えとかなっかったんですかね？」
「浩一はほんとにとんでもねえヤツでな、何度も少年院に入ったり、

真琴と知り合ったときは刑務所に入ってたんだ。そんな兄弟のことなかなか話せねえだろ？」
確かに――、と思って頷いた。
「でも、あいつにやられたことなんて事故みたいなもんじゃないですか……」
「確かになあ……」そう呟いて敦司さんはまたタバコに火をつけた。そして暫く話し出さなかった――。
「あいつが、捨て子だったって言ったよな？」
俺は頷いた。
「中学卒業して面倒見てもらってたとこ飛び出すまでは、虐待やらいじめやらで、とにかくガキの頃は悲惨だったらしい……。だから、すげえ人間不信に陥ってたみたいでよ……。でも浩二だけはなんだか信用できそうだって、最初声掛けられたときはそう思ったんだと……。俺が思うに――、浩二もあの馬鹿兄貴のせいで相当迷惑掛けられっぱなしだったみたいでよ、双子だからよ、間違われるじゃん、馬鹿のほうに……、だから、悲惨なもん持ち合ってる同士でピントがあったんじゃないかと思うんだよ……」
俺が頷くと、敦司さんは話を続けた。
「だからな、真琴にとっては、この世の中で信用できる人間は、浩二ただ一人だったんだよ――、もちろん浩二もそれに応えてた。本当に二人は……、本当に羨ましいくらい……」敦司さんはそう言ってタバコをぐいぐいと灰皿に押し付けて消した。
「浩一にやられたことで、手首を切ったんじゃねえんだ」
「えっ？」
「浩二は真琴に夢を与えてくれた人間なんだよ、浩二のおかげで生きてく希望みたいなものを初めて持てたって――、だからな――、一瞬でも別人を浩二と思ってしまったことが、真琴にとっては許されねえことだったんだ」
「そんな――」
「とにかく衝動的だったとは思うんだけどよ、そんな大切な人間を

見間違うなんて、そんな自分が許せなくなっちまって、気がついたときには手首を切ってたそうだ――」
許せなかった。本当に浩一のことが許せなかった。なんであんなヤツが平気で生きていられるのか、理解できなかった――。
「裏切られたなんて、少しも思ってないって、浩二が真琴に必死に話してよ、そんでとりあえず一件落着って感じだったんだけど……」
「感じ？」
敦司さんは頷いた。
「俺も馬鹿だった――。真琴のほうばっかりに気をとられちまって……、本当に馬鹿だった――」
敦司さんは、握った手をわなわなと震わせていた――。
そして、優しいたれ目が釣りあがり、俺のほうに顔を向けた。
俺は、唾をごくりと飲んだ――。
「お前だって、許せねえだろ？」敦司さんは怒りを押し殺すような口調で言った。
俺は黙って頷いた。
「真琴に気があるなら、黙ってられねえよな？」
確かに、直ぐにでもぶっ殺してやりたかった――。そう思ってハッとした。
そんな俺の顔を見て、敦司さんは頷いた。
「それから二日たってよ、今度は真琴が俺んとこきて、浩二に捨てられたって大泣きしだしてよ――。そんなわけねえだろって言ったら、昨日の朝、起きたら浩二がいなくって、それから帰ってこねえって言うんだよ――、電話してもつながらねえし、で、あっ！　と思ってよ――」そう言って敦司さんは舌打ちした。
「浩一に仕返しに行って、そんでもって浩二の身になんかあったんだろうって直ぐに想像した。でも、浩一がどこにいるかわかんねえし、捜索願いだす前に実家に電話してみたんだよ――。浩一の野郎はよ、声まで浩二そっくりなんだよ、まあ当然かもしんねえけど……。だから電話に出たヤツが、浩二だと思って話し出したら実は浩

一の野郎でよ――」
敦司さんは俺に真剣な表情を見せた。
「浩一の野郎……、なんて言ったと思う？」
俺は首をかしげて見せた。
「あの野郎……、浩二なんて知らねえなって言って、そんでもって、どっかの山奥にでも捨てられてんじゃねえの？　とか言ってガチャリと切りやがってよ……」
俺は唾をごくりと飲んだ――。
「とにかく、あいつの親を捕まえて、捜索願いだしてもらってよ……、そんでも全然見つからねえし、その間真琴はどん底まで落ち込んでいくし……、もうボロボロだったよ……」
「そんなに悲惨だったんですか？」
「俺的には、今のがまだましだと思う――」
（今より悲惨なんて……）そんなのありえないと俺は思った。
「四六時中、酒とタバコやりながら、ビービー泣いてよ、結局……、声……、潰しちまいやがった……」そう呟くように言って、敦司さんは顔を背けてサングラスを掛けた。小さく肩が震えている。
俺も胸が苦しくなって、俯いた――。
あの透き通った綺麗な歌声が、あの素敵な眩しい笑顔が、すべてが全部、ヤツに奪われたかと思うと、悔しくて悔しくて、本当にあいつが許せなくなった――。
「もう歌えない……、浩二もいない……、もう、あたしには何にもない……」
俺は顔を上げた。
「ガラガラの声で真琴が俺に聞かせてくれた、最後の言葉だ」

―5―

浩二さんは行方不明になってから、ひと月ほどして隣の県の山中で死体で発見されたそうだ。他殺として捜査が始まったが、いまだに犯人は捕まっていない。敦司さんはすべての事情を警察に話して、浩一を調べてもらうように訴えたが、決定的な証拠を見つけることが出来ず、従っていまだにヤツは野放しの状態ということだった。

浩二さんが死んだことは、死体が発見されてから半年ほどしてから真琴さんに教えたそうだ。浩二さんの墓の前に立っても、真琴さんは全く無表情だったと敦司さんは寂しそうに言っていた――。

浩一が現れてから、一週間がたとうとしていた。

俺はこの一週間、いつまたヤツが現れるかと思って、不安で満足に眠ることが出来ないでいた。

悪夢を見て飛び起きると、隣では真琴さんが楽しそうな表情で寝ている。

今もそうして起きた後に、彼女の寝顔を見てほっとした後だった。

彼女はいったい毎晩、どんな夢を見てこんな楽しそうな寝顔を見せているのか。

そして、この寝顔を見るたびに、幸せだった頃の彼女を想像してしまう。

もし、あの頃の彼女と出会えていたならば……。

そして、あの歌声をこの耳で生で聴きたかった……。

浩二さんはドラマーとしても、男としても俺の憧れだった。だから、彼の真似をして肩にシンバルのメーカーのロゴの刺青を同じように入れた。（実は左右間違っていたが……）

浩二さんが相手なら、真琴さんを奪おうなんて考えもしなかっただろう。きっと憧れの二人として、尊敬しながら付き合っていたに

違いない。
そう思えば思うほど、浩一のヤツが憎くなってくる。
敦司さんは俺のことを心配してくれた。無茶なことをするんじゃないと、何度も俺に言って聞かせた。
勿論ヤツは憎い。でも、まともな手段であいつとやりあっても無駄だろう――、ヤツをこの世から消し去らない限り、真琴さんが普通に幸せになることは出来ないと思った。
（完全犯罪をやる方法はないものか……）
俺はこの一週間、ヤツを殺す妄想にとりつかれていた。
（なに、馬鹿なことを考えているんだ……）
溜息をついてベッドをおり、冷蔵庫から水のペットボトルを出してきてテーブルの前に座った。
夜が明けてきて明るくなってきた窓を見つめ、真琴さんが日の出を見に連れて行ってくれた日のことを思い出した。そのことを敦司さんに話すと、敦司さんは「そうか……」とだけ呟いて涙を堪えているようだった。
（何とかできないものか……）
また、ヤツを殺すことを考えてしまいそうになり、慌ててペットボトルの水をラッパ飲みした。そして勢いよくテーブルの上に置くと、その横で彼女に上げた携帯電話が小さく弾んだ。俺はそれを手に取った。
溜息をついて蓋を開け、メールをチェックしてみる。
彼女は結局、これを持ち歩いてくれなかった。メールを出しても一度も返信してくれたことはなかった。
受信ボックスには俺が出したメールばかりが残っていた。
ふと、送信ボックスに未送信のメールがあるのに気がついた。宛先と件名はない。なんとなく、それを開いてみる――。
『コウジ』最初のその文字を見て、バクンと心臓が大きく動いた。
目を見開いてその続きに目を走らせる。
『コウジがなんであたしなんかを誘ってくれたのか分からないけど、

あたしは嬉しかったよ。明日、晴れるといいね。真琴より』
俺はその短い文章を何度も何度も繰り返し読んだ。涙で文字が霞んで見えなくなるまで――。
暫くして落ち着くと、そのメールを自分の携帯に送信した。そして、旅行のための準備を始めた――。

昼過ぎに御殿場近くに着いた。ファミリーレストランへ入り、注文を済ませると、真琴さんはぼんやりとした表情でタバコに火をつけた。走り屋仕様の彼女のバイクを、長時間前屈姿勢で運転してきて、肩や背中ががちがちだった。俺はそれを揉み解しながら、彼女のぼんやりとした表情を見つめた。
今朝、荷造りを終え叔父さんに電話すると、来週末までなら別荘を使っていいと言ってくれた。その後敦司さんへ電話して、暫く真琴さんを休ませると連絡した。電話を切る間際、敦司さんは、「真琴をよろしく頼む……」とぼそりと呟いた。
もう、迷いはなかった。
俺は真琴さんを連れて逃げる。
別に大学に未練はない。父親がどうしてもいけというので、仕方なく、とりあえず入れる大学を選んだまでだ。
俺の夢はミュージシャンになることだったが、今はそんなことより、何よりも、真琴さんと話がしたい。彼女の笑顔が見たい。それが今の俺の、何よりの希望だ。
とりあえず別荘へ身を隠し、次の行き場所を考える。浩一が別荘の場所を知るわけがないし、まったく心配なことなどなかった。
当面過ごすための金も、先日、押入れの中の冷蔵庫の中に百万近くあったのを見つけたので、それで何とかなる。
浩一の恐怖から逃れられれば、きっと真琴さんは俺に心を開いてくれる。そして、時間が立てばあの素敵な歌声も戻るかもしれない。そしたら、二人でまたバンドを始めてプロを目指せばいい。

そんなことを考えていると注文した料理がテーブルの上に置かれた。真琴さんは目の前に置かれたオムライスを、ぼんやりとした表情で見つめた。
「さあ、食べよう！」と俺は元気に言って真琴さんにスプーンを差し出した。

叔父さんの別荘は小さなログハウスだった。俺はもっと豪勢な建物を想像していたので、暫くあっけに取られてその建物を見つめていた。でも、建物自体は割りと綺麗で、入り口の直ぐ横には広いウッドデッキがある。俺は今夜、そこで真琴さんとバーベキューをやろうと思って、少しわくわくとした気持ちになり、彼女の手を取って入り口のドアを開けた。
中は二十畳くらいのフローリングの一間で、キッチンとバスとトイレが着いている。部屋の中にはテレビとローテーブルがあるだけだった。俺はそれでも十分だと思いながら中へ入り、とりあえず空気を入れ替えようと窓を全開にして、それからエアコンのスイッチを入れた。
真琴さんの姿を探すと、彼女は入り口の反対側の窓の下にもたれて胡坐を組み、タバコに火を点けていた。俺はキッチンから灰皿を探し出してきて、彼女の傍へ置いた。
彼女がタバコを吸い終わると、彼女を連れて買出しに出た。
彼女の手を握り、ゆっくりと林の中の砂利道を歩いた。
「なんかやりたいこととかない？」
「……」
「ボートにでも乗る？　それとも、テニスとかは？」
「……」
「そうだ！　夜、花火でもやろうか？」
「……」
無反応な彼女の態度は寂しいが、それでも心はすっきりとしてい

た。
（最初はこんな感じだったんだ。でも、ヤツが来る前には俺の誘いを喜ぶまでになってくれていたんだ。焦る必要なんてない。とにかくいつかはきっと……）

その晩、外のウッドデッキでバーベキューをやることにした。ウッドデッキには大きな木のテーブルとバーベキューグリルがあり、俺はなれない手つきで炭をおこした。彼女が向かっているテーブルの前に、灰皿と缶ビールと缶チューハイを並べておくと、彼女は缶チューハイを手にとって蓋を開けた。俺は彼女が取らなかったビールを手に取りそれを飲みながら肉や野菜を焼き始めた。

最後にやきそばを作って彼女と並んで座ってそれを食べながら、俺は自分のことを彼女に話した。好きなミュージシャンの話、好きな曲のジャンル、今までやってきたバンドのこと、ライブなどでのエピソードなどだ。彼女は俺のほうに顔を向けることなく、無表情でやきそばを食べていたが、それでも俺は独り言のようにべらべらと、彼女の態度など気にせずに話し続けた。

そして、敦司さんと浩二さんが前にやっていたバンドを見て感動したことを話した。その時あまりにも浩二さんがかっこよかったので、彼の真似をして刺青を入れたことを話した。

「俺もこのメーカーのシンバル、好きだから……」

そう言いながら、Tシャツの袖を捲って見せると、彼女はゆっくりと顔をこちらに向けてきて、その刺青を見つめた。

初めて彼女と会った日と同じ目だった。あの日もこの刺青をそんな風に見つめていた。

「俺のコウは、光って書くんだよ」

「……」

俺は彼女が目を逸らすまで、シャツの裾を捲って見せた。

彼女はあいつが現れてから、Tシャツを脱がされるのを嫌がらな

くなっていた。おそらく、もう見られたから隠す必要もなくなったと思ったんだろう。でも、今夜も彼女を抱くことが出来なかった。あれ以来彼女は全く濡れなかったからだ。唾をつけて無理やりしようと思ったこともあるが、結局出来ないでいた。
俺の腕枕で眠っている彼女の髪を優しく撫でながら、悶々としてなかなか眠れなかった。

あっという間に一週間がたとうとしていた。
この一週間、俺は彼女を連れて林の中を散歩したり、山中湖でボートに乗ったり、バイクで富士山に登ったりと思いつくことを色々とやってみたが、彼女の反応は一向に変わろうとしなかった。
さすがに焦ってきた。あさってにはここを引き上げなくてはならない。
瞬きで頷いてくれるだけでもよかった。彼女が何か意思表示してくれるのをずっと待っていたが、全然駄目だった。
朝食を終え、ウッドデッキのテーブルに向かっている彼女にアイスコーヒーを出し、自分も向かい側に座って一口啜った。
「ねえ、俺のこと嫌い？」
「……」
「迷惑？」
「……」
「ねえ、もう帰りたい？」
「……」
はあっと大きく溜息をついた。焦るなと自分に言い聞かせても、ついイライラしてしまうようになっていた。
あさってここを出たら、北海道でペンションをやっている十歳上の兄のところに身を寄せようと思っていたが、こんな調子の彼女を連れて行ったら何を言われるか分かったもんじゃないと思った。
（やばいなあ……、やばいなあ……）

ふと気がつくと、イライラしている。俺はまた大きく溜息をついた――。

彼女を別荘に残して、昼飯の買出しに出た。一人になってよく考えたかったからだ。

彼女は本当に俺と一緒にいたいのだろうか……。

彼女を連れまわすのは、俺の身勝手なんじゃないだろうか……。

彼女は浩一から逃げたいと思っていないのだろうか……。

彼女は一生このままでいいと思っているのだろうか……。

とにかく、声でじゃなくてもいい。何でもいいから彼女の気持ちが知りたかった。

また溜息をついてしまった。なんだか、考えるのが面倒になってきた。彼女をここへ連れてきたときは、自信たっぷりだったのに、今はそんな自信はまるでない。

俺は彼女のためにすべてを捨てる覚悟だったのに、彼女はそれに応えようとしてくれない。なんだか、相手が俺じゃなくてもいいみたいに思えて仕方がない。

山中湖の湖畔にあるコンビニエンスストアーの前に着いた。

入り口の前にぼんやりと立ち、今日は何を食べようと思ったときだった。

「光二！」と、大声で呼ばれた。聞き覚えのある女の声だった。

恐る恐るそちらのほうに顔を向け、目を見張った直後、思わず口説き目線を放っていた。

「光二！」と彼女は手を振って笑みをこぼし、俺に駆け寄ってきた。

「光二どうしたの？　なんでいるの？　びっくりしちゃった」

なんだか、久しぶりに人に話しかけられたのが嬉しかった。不意に胸が熱くなってくるのを感じた。

「なによ、じっと見つめちゃって……、恥ずかしいじゃん……」

彼女は、はにかんで身体を横に向けた。真っ白なうなじが目に飛び込んできて、思わずごくりと唾を飲んだ。

久しぶりに見た彼女は、前と少しも変わっていないのに、彼女がとても可愛く見えて俺はどぎまぎしてしまった。
「ねえ、一人？」彼女は辺りをきょろきょろしながら言った。
「ん？　ああ、ひとり。由美子は？」
「さっき、みんなと買い物に来たんだけど、買い忘れたものがあったから戻ってきたのよ」
「みんな？」
「ああ、サークルの合宿に来てるのよ。光二と全然連絡とれないってみんな心配してたよ」
俺は、えっ？　と思って携帯電話を取り出して驚いた。間違って真琴さんの携帯電話を持ってきていた。自分の携帯電話はアパートに置きっぱなしだ。
「携帯変えたの？」由美子は携帯電話を覗き込んで訊いた。
「ん？　ああ、ちょっと前にね」俺は慌てて携帯電話をポケットに入れた。
「ねえ、時間ある？」由美子は上目遣いで俺に訊いて来て、俺は思わず頷いていた。
「ちょっと寄ってかない？」彼女はコンビニエンスストアーの隣にあるハンバーガーショップを指差して言った。
俺が頷くと、彼女は嬉しそうに笑みをこぼして、俺に腕を絡めてきた。俺はそんな彼女をさっきから、どうやって口説こうか無意識に考えていることに気がついた。
（な……、なに考えてんだ！）
立ち止まろうとした瞬間、腕が由美子の胸に当たって、思わずその腕に全神経を集中しながら彼女と並んで歩いてしまった。
「なんか、光二と歩くの久しぶり」という彼女の声も、彼女から漂ってくるシャンプーの香りも、すべてが懐かしかった。
勘違いしてたんじゃないだろうか、ひょっとして、ずっと悪い夢を見ていて、さっき由美子に声を掛けられた瞬間に目覚めたんじゃないかと思った。

真琴さんも、浩一も、実はこの世になんかいないんじゃないかと考え始めていた――。
「光二……、怒ってるよね？」
「えっ？　なにが？」
「私が光二を振ったこと……」
やっぱり夢じゃなかった。俺は思わず奥歯をかみ締めていた。
「光二もてるから、私、不安だったのよ……」
俺は隣で注文の列に並んでいる彼女を見つめた。
「だから……、もしかしたら……、分かれるって言ったら……、光二がもっと私に向いてくれるかと思って……」
俺は何も答えず上を見上げ、メニューの一覧を目で追った。
「馬鹿だね、私……、光二のこと……」
彼女の視線が俺に向いているのを感じた。
多分ここで彼女を見たら、俺は……。
気を紛らわそうと、必死にメニューを順番に読んだ。
（バンバーガー、チーズバーガー、ダブルバーガー）
真琴さんはハンバーガーが好きだろうか……。肉好きだから、きっと好きに違いない。
（コカコーラ、アイスコーヒー――、スマイル……）
ごくりと唾を飲んだ――。
スマイル０円……。
「いらっしゃいませ！」目の前で、店員の女の子が俺に満面の笑みを見せた。
彼女の……、真琴さんの……、
（真琴さんの笑顔が見れるんだったら……、百万でも、二百万でもいくらでも……）
「ごめん！　由美子！」俺は用事を思い出したと言い残して、店を飛び出した。
（なに考えてんだ！　このドスケベ野郎！）
俺は自分にぎんぎんにむかついていた。

（思い通りにならないからって、こんくらいで！）
ふと、人にぶつかりそうになり立ち止まると、フリーマーケットの店が並ぶ広場の中を歩いていたことに気がついた。
俺はいらいらしていた気を紛らわそうと、一軒ずつ店の商品を眺めながら別荘に向かった。
古いアコースティックギターが五千円で売られていて、俺は買おうかどうしようか迷った挙句、買わずに次の店の前に立った。
古着を並べている店だった。彼女に服でも買っていってあげようかと思いながら、展示されている女性物の服を一着ずつ見ていった。
「あっ！」と思わず声を漏らしてしまった。
真琴さんが浩二さんと一緒に写っていた写真の中で着ていた、薄い水色のワンピースにそっくりの服があった。
「いかかですか？」店員が近づいてきて声を掛けてくると、俺は迷わずそれを買った。
さらに、そこで白い女性もののサンダルを買い、そこの店員に化粧品を売っている店の場所を聞いて、そこで適当に化粧品を買い集めた。
そして帰りに由美子と入ったハンバーガーショップで、ハンバーガーをいくつか買うと、急いで別荘に向かった――。

「ごめん！　遅くなって！」と大声で言いながら、別荘のドアを勢いよく開けた。
部屋の中に彼女の姿が見えなかったので慌てたが、足元に彼女のスニーカーがあったのでほっとしながら中に入った。
水洗トイレの水が流れる音が聞こえて、暫くすると彼女はトイレから出てきた。
「真琴さん！　これ見て！」俺はワンピースを広げて彼女に見せた。
「……」彼女はただ、ぼんやりとワンピースを見つめるだけだった。
（我慢、我慢……）思わず切れそうになったのを必死で堪えた。

彼女がテーブルの前に座ってタバコを取り出すのを目で追って、俺はテーブルの上にハンバーガーを並べた。
「好きなの取って」
彼女はまたぼんやりとした目つきでハンバーガーを見つめる。
俺の予想はチーズバーガーだった。
彼女はタバコを揉み消すと、その手をゆっくりとハンバーガーのほうへ動かしていく。
（よし、それだ！）チーズバーガーの上に彼女の手が来た瞬間、俺は心の中で叫んでいた。
「えっ？」彼女は、フィレオフィッシュを取った。
（うそ！　なんで？）彼女が肉より魚を選ぶとは思えなかった。
「真琴さん、フィレオフィッシュ好きなの？」と言って彼女の顔を見た瞬間、バクンと心臓が大きく打った。
彼女は、ゆっくりと瞼を閉じた――。
「あ……、あの……」
彼女は俺を見つめながら、フィレオフィッシュにかぶりついた。
「あの！　それ……、フィレオフィッシュ、好きなの？」
彼女は口をモグモグしながら、ゆっくりと目を閉じた。
（うおおお！）心の中で絶叫しながら、思いっきり手を握り占めた。
彼女はフィレオフィッシュを食べ終えると、ポテトに手を伸ばした。俺はそれを見た後、立ち上がって冷蔵庫からアイスコーヒーのボトルを出して、彼女と自分の分を準備しテーブルの前に座った。
ハンバーガーに手を伸ばしかけたが、胸がいっぱいで食べられそうになかった。
ずっと、彼女が食べている姿を静かに見つめていた。

「ねえ、これ着てみて」
夕飯を終え、ぼんやりとテレビを眺めいている真琴さんに、俺はワンピースを広げて見せて言ったが、彼女は完全に無視だった。

さすがに俺はむっとしてしまい、彼女の服を剥ぎ取るように脱がして、ワンピースを頭からかぶせた。
「おお！」震える指でワンピースのボタンを掛けながら感動していた。
あの写真の雰囲気が出ている。これで笑ってくれたら最高だと思いながら買ってきた化粧品を広げた。
「ねえ、ちょっと化粧してみてよ」
「……」
（ぐっ！）聞くんじゃなかったと思った。仕方なく、自分でやってみるしかないと思った。
（えー、どうすりゃいいんだ？）
とりあえず分かるものは、口紅とアイシャドーとマスカラ……。
（んー、ファンデーションって最初に塗るのか？）
とりあえずファンデーションを塗りたくり、口紅を手に取った。
（ぐっ！）彼女の少し厚めの唇がぐにゃぐにゃして上手く濡れなかった。
「ちょっと、いーって口して」
「……」
（うがあ！）俺は彼女の唇を押さえつけてむりやり塗った。

「ちっ！」
俺のへたくそな化粧で、ピエロかちんどんやにしか見えない彼女の顔を見て、俺はがっくりとうな垂れた。
彼女を横目でちらりと見ると、そのままの顔でテレビをぼんやりと眺め始める。
俺は、彼女に背を向けてふて寝した――。

目を開けると朝だった。
寝すぎて頭が重かった。
部屋の中を見渡すと、真琴さんの姿が見えない。外かなと思って

立ち上がり入り口の横の窓の向こう側に目を向けた。
誰かがウッドデッキのテーブルのところに背を向けて腰掛けている。
でも、真琴さんじゃないと思った。いつもの彼女の服装じゃなかったからだ。――と思った瞬間ハッとなった。
急いで立ち上がり、ウッドデッキへ出る窓のサッシを思いっきり開いた。
薄い水色のワンピースを着た真琴さんは、ゆっくりと俺のほうに身体を向けてくる。
心臓がバクバクしているのを感じた。
彼女の顔を見た瞬間、ぼうっとしていた頭の中が光で満たされたような感じがした。
彼女の傍へ立ち、薄化粧した彼女の顔をじっと見つめた。
綺麗だった――。あの写真の彼女に、また近づいたと思った。

急いで朝食を終え、ここでの最後の一日を満喫しようと思った。
最初に、彼女と手をつないで林の中を散歩した。ここへ来てから何度もこの道を散歩したが、今は全く気分が違っていた。
「俺も親がいないんだ……。正確に言うと、母さんは小学校の六年のときに死んだ。父親はいるけど本当の父親じゃないんだ……」
ちらりと真琴さんを見ると、彼女はぼんやりと正面を向いて歩いてる。俺はかまわず話し始めた。
「お互い子持ちで再婚して……、本当の父親のことは何にも知らない……。今の父親は俺にやたらと厳しくてさ、兄貴ばっかり可愛がって、だから俺すっごく嫌いでさ、何度も家出しようと思った……。でも、兄貴は俺に凄く優しくしてくれて、血がつながってないのに本当の兄貴みたいで……、兄貴がいなかったら多分やってけなかったと思う。その兄貴も俺が中学卒業したらペンションやりたいからって言って家を出ちゃってさ、だからあの父親と二人でいるのに耐えられなくて、高校のときはバンドとバイトで殆ど家にはいなかっ

た。で、大学は家を出るために、わざと遠いとこ選んで今のところにしたって分け……。それで、真琴さんと出会った」
彼女をじっと見つめた。でも、彼女はこちらを向いてくれることはなかった。
湖畔の開けた通りに出たところで、美容院の看板が目に留まった。
「ねえ、髪、切らない？　俺もぼさぼさだからさ……」
彼女はゆっくりと目を閉じた。
美容院はすいていて助かったと思った。彼女と隣同士で座り、髪を切ってもらうことになった。俺はさっぱりと短くしてもらうように指示をして、真琴さんの様子を伺った。
「どうなさいます？」と若い女性の美容師が真琴さんの後ろから、鏡の中の彼女を見ながら言った。
「真琴さん、ショートでいい？」俺は写真の彼女を想像して訊いてみた。
「ショートが似合いそうですけど」
と美容師も言うと、真琴さんはゆっくりと目を閉じた。
「あっ、すいません、それで」
俺が変わりに答え、写真の彼女の髪型を思い出しながら、細かく美容師に指示を出した。

俺は真琴さんの様子をひやひやしながら、髪を切ってもらっていて、出来上がった自分の髪型に不満だったが、髪を切り終え見違えるように変わった真琴さんに大満足だった。
（やっぱこれだよ、スッゲー可愛いよ）
俺は彼女を抱きしめたくなる欲求を必死に堪えた。

昼食を終え、また彼女と手をつないで湖畔を散歩した。
ボート乗り場へ差し掛かり、彼女をボートへ乗ろうと誘った。
貸しボートは、普通の手漕ぎボート、白鳥のボートそしてアヒルのボートがあった。

「どれにする？」
俺が一つ一つ訊いていくと、彼女はアヒルのボートを選んだ。
岸から遠く離れたところまで漕ぎ出し、俺は彼女を抱き寄せキスをした。彼女のすべてを吸い取ってしまいたかった。彼女も俺に答えるかのように舌を絡めてきた。

ボートを下り、今夜はレストランにでも行って食事をしようと彼女を誘った。それまで、まだ時間はかなりある。俺は彼女を連れてゆっくりとまた、林の中を散歩しながら行こうと思って彼女の手を取った。
暫く林の中を歩いていると、彼女がふと足を止めた。
彼女が顔を向けているほうを見ると、白いペンキが所々はがれた木のベンチが一つある。
俺は写真の彼女を思い出し、一緒に写真を取ろうと彼女に言った。
近くを通りかかったカップルの男性に頼んで、間違って持ってきた真琴さんの携帯電話で撮影してもらうことにした。
あの写真と同じように、彼女の右側に座りポーズをとった。
浩二さんは足を組んで写っていた。だから俺もそのポーズを取ると、真琴さんが俺に腕を絡めてきた。
心臓がバクバクして、暫く彼女から目が離せなかった。
「はい！　撮りますよー」
と言う声にハッとして正面を向いた。
「はい！　笑って！　チーズ」
俺は必殺の口説き目線で写真を取ってもらった。
「ありがとうございます！」
と丁寧にお辞儀をしながら、写真を撮ってくれた男性にお礼を言って、返してもらった携帯電話の液晶画面を見て、息を呑んだ――。
（……）叫びだしたいくらいだったけど、声の出し方を忘れてしまった感じだった。
液晶画面がぼやけて見えて、必死に涙を拭った。

（やべえ！　ダッセー、なに泣いてんだ！）
液晶画面の中の真琴さんは満面の笑顔で写っていた。
あの写真の真琴さんそのものだった。
嬉しくて、嬉しくて――、諦めなくて本当によかったと思った。
涙が収まり振り返って彼女を見ると、彼女はベンチの背もたれを指でなぞっている。
なんだろうと思いながら、近づいてみた。
「あっ！」
真琴さんが指で指している先に相合傘が掘り込まれていて、そこには真琴と浩二という文字が刻まれていた。
（ここだったのか……。ここがあの写真の場所だったのか……）
彼女の目は遠くの何かを見つめているようだった。俺はそんな彼女の姿を黙って暫く見つめていた――。

試しにステーキレストランと回転寿司ならどちらがいいかと訊いてみると、真琴さんは回転寿司を選んだ。
回転寿司屋に入ると、彼女はいくらの軍艦巻きしか食べない。俺は彼女の好みが分からなくなってきた。
夕食を終え、バーに入ってカクテルでも飲むか、喫茶店でコーヒーでも飲むか訊いてみると、彼女は喫茶店のほうを選んだ。近くの喫茶店に入ったが、彼女はタバコを吸わない。よく考えてみると、朝からずっと吸ってないような気がした。
俺は彼女の心が普通に戻っていく予感を感じて、嬉しくなってきた。
別荘までの帰り道、彼女の肩を抱いてのんびりと歩いて帰った。
星が瞬く夜空を見上げながら、北海道での彼女との暮らしを想像して、わくわくとした気持ちが沸き起こってきた。
（向こうのほうが、こちらよりずっと星が綺麗だろう……）
「あっ！」（真琴さんが喋ってく……。あーあ……）流れ星が見え

たので、急いで願い事をしようとしたが、間に合わなかった。
溜息をつきながら彼女の顔を見ると、彼女は正面を向いて星空なんかには興味がないようだった。
また溜息をつきながら、携帯電話に保存してある、今日彼女と取った写真を見た。
満面の笑顔の彼女を見つめ、これを見ればこの先どんな嫌なことがあっても乗り越えられるような気がした。

別荘へ帰ると、シャワーを浴びるのももどかしくなって俺は彼女を抱きしめた。そして、むさぼるように彼女にキスをした。
「明日……、別荘を出ないといけないんだ……」
顔を離して、彼女に話しかけた。
「北海道に兄貴がいるんだ。そこに行こうと思う……」
彼女の目をじっと見つめた。
「一緒に……、ついてきてくれる？」
彼女の目がゆっくりと閉じるのを見た瞬間、胸が熱くなってきた。たまりかねて、また彼女を思いっきり抱きしめてしまった。

ゆっくりと、彼女のワンピースのボタンを外し始めたときだった。ふと彼女の顔を見てハッとなった。
あのときの表情だった。
（うそだろう……、そんなわけないよ……）
俺はテレビを消して、耳を澄ませた――。
がーっとエアコンの音がするだけで、バイクの音は聞こえない。
もう一度彼女を見てみると、やはり彼女はおろおろとうろたえている。
彼女の名前を呼ぼうと思ったときだった。
ドドドっという、低いバイクの音が聞こえたような気がして、息を呑み、耳に全神経を集中した――。

ドドッ、ドドッというバイクの音が今度ははっきりと聞こえてきて、俺は思わず立ち上がった。
急いで玄関と、その横の窓のサッシの鍵を確認し、窓のカーテンを閉じた。
ドドッ、ドドッっと、もうはっきりとこちらにバイクが近づいてくるのは確実だと思った。
俺は、真琴さんを風呂場へ押し込み、中から鍵を掛けるように叫んだ。そして、部屋の中の明かりを消した。
ドドドン！　ドドドン！　という不気味なうなり声のような低い単気筒のバイクの音が大きくなり、カーテンが外からの光を受け浮かびあがっている。
（くそう……、なんでここが……、くそう……）
もう、覚悟を決めた――。
ここで食い止めなければ、また振り出しだ。
バーン！　という大きなバックファイヤーの音がした後、バイクのエンジンの音が消えた。
俺は下唇を噛んで玄関を睨み付けた。
ガンガン！　とヤツは鍵の掛かったドアを何度も開けようと引いているようだった。
直ぐにその音は止み、コツッ、コツッとウッドデッキを歩いている足音が聞こえてきた。
光で浮かびあがっているカーテンに、人影が写った。
俺はごくりと唾を飲み込んで、そいつを睨み付けた。
すると、ガラスが割れる音が聞こえて、その後サッシが開けられた。外からの風が吹き込んでカーテンが揺れている。そのカーテンをゆっくりと開き、ヤツは姿を現した――。
俺は歯を食いしばり、拳を力いっぱい握り締めた――。

＊

遠ざかっていくヤツのバイクの音がするのに気がついた。
顔や身体のあちこちがずきずきする。
舌で口の中をまさぐると、上の前歯と左上の奥歯が一本ずつないのが分かった。
痛みを堪えて目を開けようとしたが、目が開かない。
ぼんやりと視界が広がり、瞼が腫れていてこれ以上開かないんだと思った。
(情けない……、何で俺ってこんなに弱いんだ……)
ヤツに一発でも拳を当てた記憶がなかった。
(また……、振り出しに……、せっかく彼女が笑ってくれたのに……)
彼女を見るのが怖くて、暫くそのままじっとしていた。
それでも、万が一彼女が大怪我でもしていたら大変だと思い、ゆっくりと起き上がった。
部屋の真ん中に、丸裸の彼女がうつ伏せで倒れている。
這って彼女の傍へ近づいた。
小さく彼女の肩が動いているのを見て、とりあえず彼女は生きていると思った。
「真琴……、さん……、大丈夫?」
「……」
背中に目を向けると、また新しい爪痕がいくつも出来ている。
(ごめん……、ごめんなさい……)
涙が目に染みる――。俺は蹲って、彼女に謝り続けた――。

優しく髪を撫でてくれるのを感じてハッとした。
「光二……」
バクンと心臓が大きくなった。
「えっ?」
勢いよく身体を起こすと、彼女が足を崩して座っていた。
「あっ、あの……」

「光二……、大丈夫？」
しわがれた声だった。でも、やさしい口調だった。
「ああ……、うわあ……、ああ……」
言葉にならない声しか出なかった。たまらず彼女を抱きしめた。
「光二……、大丈夫？」
「うああ！」
「光二……」
嗚咽を漏らしている俺の背中を、彼女は優しく撫でてくれる。
もう、駄目だった――。
嬉しいのと、悔しいのと、ほっとしたのと、情けないのと……、
様々な感情が沸き起こってきて、言葉を発することが出来なかった。

「真琴……、真琴さん！」
ようやく喋ることが出来た。
「光二……」
「ごめん……、真琴さん、ごめん！」
「光二、大丈夫？　痛くない？」
耳元で囁く彼女の言葉に、俺は嗚き声を必死に堪えながら頷いた。
「真琴さん！　一緒に……、一緒に逃げて！」
「光二……、怖い？　あいつが、怖い？」
「俺……、お願い！　もう、あいつに見つからないところに行こう！　お願い！　一緒に逃げて！」
「光二……、大丈夫よ……、大丈夫だから……」

大丈夫よ……。
（お願い……）
大丈夫だから……。
（真琴さん、お願い……、一緒に……、逃げて……）
光二……、大丈夫だから……。

＊

鳥のさえずる声が聞こえる。
ふわふわとして気持ちのいいところに寝転んでいるようだ。
さっきから、若草の香りが鼻をくすぐっている。
俺は薄目を開けてみた。
まばゆい光が広がり、暫く目の前が真っ白になった。
目を細めて、ようやく目が慣れてくると、突き抜けるような真っ青な空が広がっていた。
遠くからアコースティックギターの音色が聞こえてきた。
ゆっくりと身体を起こし、辺りを見回すと、俺は大草原の中にいた。
右も左も地平線まで広がる草原で、その上には雲ひとつない青空が広がっている。
後ろからギターの音色が大きくなってきて、俺はそちらに身体を向けた。
遠くの白いベンチで、青い服を着た女性がギターを爪弾いている。
（そうか……、来たんだ……、彼女と一緒に、北海道へ来たんだ）
透き通った歌声が聞こえてきた、彼女の歌だ。
俺は目を閉じてその歌に耳を傾けた。
（声も元通りになったんだ……。よかった。これでまた彼女とバンドが始められる。敦司さんも誘おう。敦司さんもきっと喜んでくれる）

目を開けようとすると顔面がずきずきと痛んで開けられなかった。顔だけでなはい。体中のあちこちが死ぬほど痛い。
その痛みで気がついた――、
（夢か……）
痛みを堪えて身体を起こした。なんとなく予感はしていたが、彼女は部屋にはいなかった。ワンピースが綺麗にたたんで置いてある。

その上には、引きちぎられたボタンが乗せてあった。
テレビの横に置いてあった彼女のヘルメットがない。靴脱ぎに這っていくと、彼女のスニーカーはなく、俺が買ってあげた白いサンダルが綺麗に揃えて置いてあった。

＊

砂利道をこちらに向かって走ってくる車の音が聞こえる。
俺はそれに興味を示すことなく、靴脱ぎに腰掛けたまま昨日撮った彼女の写真をぼんやりと見ていた。
暫くして、正面のドアが勢いよく開いた。
「光二！」
敦司さんだと思って顔を上げると、彼の顔面はボコボコに晴れ上がっていた。
昨日、敦司さんの仕事場に浩一が来て、気を失うほどの暴行を受けたそうだ。その後気がついて暫くすると、パソコンのディスプレーにはっておいたここの場所をメモした付箋紙がなかったという。
直ぐに俺に連絡しようとしたが、俺が全然電話に出ないので心配になってここに来たということだった。
俺は真琴さんが話してくれたことを呟くと、敦司さんは慌てて俺の腕を掴んで外へ連れ出し、車の助手席に俺を押し込んだ。
「ど……、どうしたんですか？」
「馬鹿！　真琴が今、何をしようとしているのか、分からないのか！」
敦司さんはそう叫んで、車を走らせた。
敦司さんの言葉でようやく気がついた。真琴さんは浩一に仕返しを――。
馬鹿だった。俺はてっきり自分があんまり弱いので、愛想をつかされたんだと思って落ち込んでいたが、そうじゃない――。
俺のため？　それとも、単純に浩一が憎いから？

あいつをどうにかするなんて、あいつを殺すことしか思いつかなかった。でも、正面からやりにいくとするなら、俺でもあいつと刺し違える覚悟がないと出来ないと思った。真琴さんはどうやって――。

（駄目だよ、真琴さん……。やるなら俺がやるよ……。やめてよ……、やめてよ……）

とにかく、最悪のことが頭に浮かんできて、ガタガタと震えながら、車に揺られていた――。

彼女のアパートの前に着いた途端、最悪の予感が当たってしまったと思った。

アパートの前の駐車スペースにパトカーが一台と、赤色等を乗せた黒いセダンが一台止めてあった。

俺は急いで彼女の部屋に入ろうとしたが、警察官が前に立ちはだかって、どこうとしない。

「どいてくれ！」

「駄目だ、向こうへ下がってなさい」

「どけ！　真琴さん！　真琴さん！」

俺が叫んでいると、部屋の中からスーツを着た中年の男性が暑そうに額に汗を浮かべて出てきた。

その男は警察手帳を見せ、名前を名乗った。

「あの！　真琴さんは？　真琴さんは、どこに！」

「君は？」

「あの！　真琴さんは？　教えてください、真琴さんは？」

「こいつは、山下光二。自分は光田敦司です。真琴と三人でバンドをやってるんです。真琴は俺の店で働いてます」

敦司さんが後ろから、俺の肩を掴んで言った。

「おい！　教えろ！　真琴さんはどこだ！」

ふいに、中年の刑事の男の後ろから若い男が顔を覗かせた。

そして言った。
「鳥越真琴なら――、死んだよ」
「う……、嘘言ってんじゃねえよ……」
「おい、光二やめろ」
「ふざけんなよ……」
「光二……」
「出せよ！　真琴さんに会わせろよ！」
「やめろ！　光二！」
「うわああ！」
（なんで……、なんで……、やだよ……、嫌だ！）

＊

ここはいつもいい天気だ。そして暖かい。
目の前の地平線まで続く草原は、気持ちのいい風に揺れていて、上を見上げれば、雲ひとつない真っ青な空が広がっている。
そして、ここにくれば彼女に会える。
大草原にぽつんとある白いベンチに腰掛けていると、薄い水色のワンピースを着た彼女が隣に座り、俺に優しい笑顔を見せてくれる。
ここでは彼女は普通に話をしてくれる。しわがれてない、綺麗な優しい声だ。
だからいつも、ずっと彼女と話をしている。
好きなミュージシャンの話。バンドのこと――、話すことはいくらでもある。
俺のくだらない冗談に彼女は楽しそうに笑ってくれる。そんな彼女が愛おしくなって、俺は彼女に口づけする。
彼女の体の感触も、唇の感触も、全くそのままだ。
ずっと彼女と一緒にいたい。
ずっと彼女を抱きしめていたい。

でも、どうしても、ここにずっといられるわけではない。
かならず、ここから引き戻される時間がやってきてしまう――。

「光二、起きた？」
エプロン姿の由美子が俺の顔を覗きこんでいた。
「光二、今日休みでしょ、ねえ、天気いいからさ、またあそこ連れてってよ」
ここに真琴さんはいない。だから、俺はこの世界には興味がない。だからと言って、死のうとも思わない。なぜなら、死んでしまったら、彼女に会えなくなってしまうからだ。
「ねえ、光二、学校の上のさ、海が綺麗に見えるとこ――、ねえ、行こうよ」
ああ……、早く彼女に会いたい……。
そして――、もっと、もっと、沢山話しがしたい……。

―完―

最後まで読んでいただきまして、ありがとうございました。（Y，Z）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5191c/

アヒルの声

2010年10月8日15時42分発行